

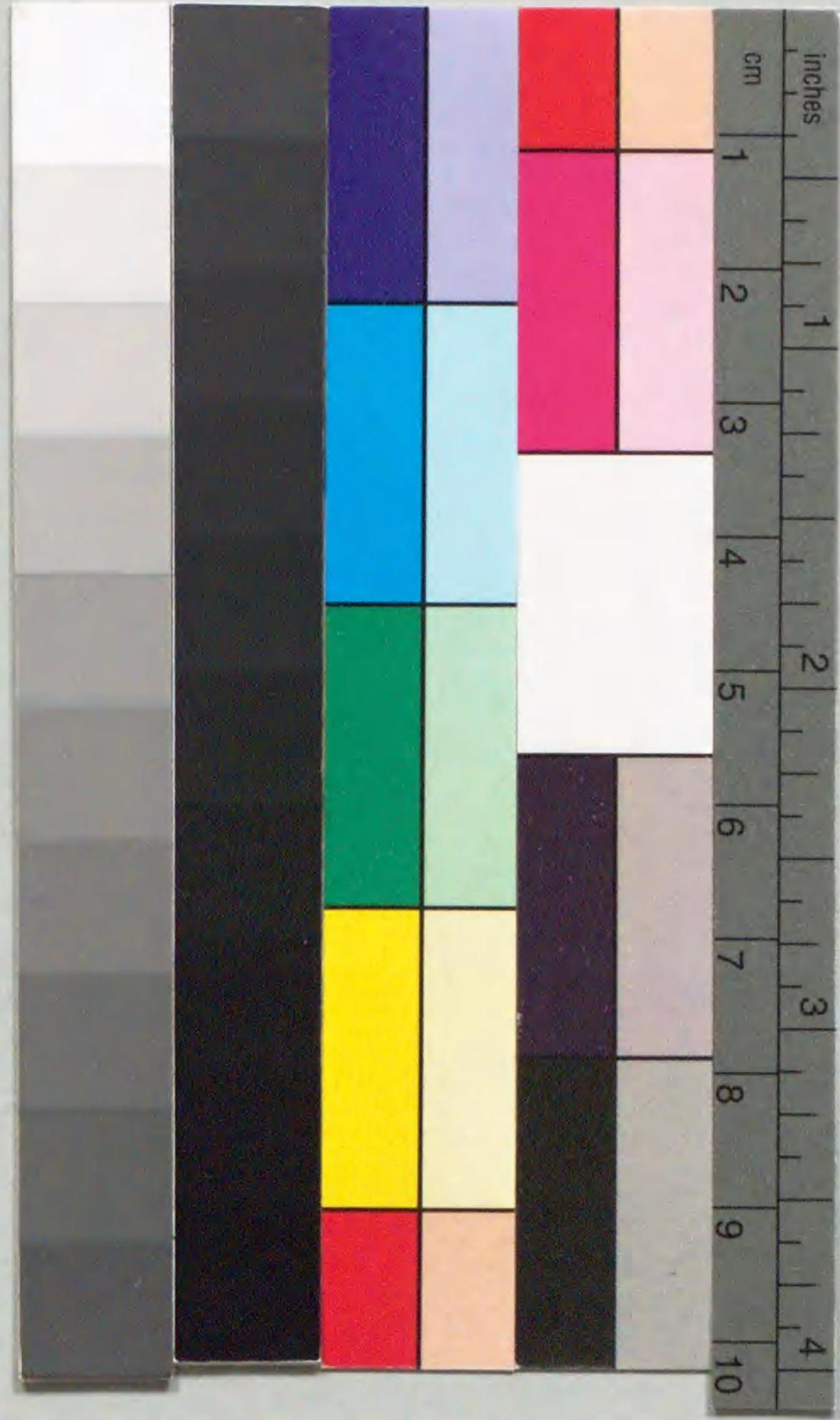
今復辦 廿日六
172
4
223
277

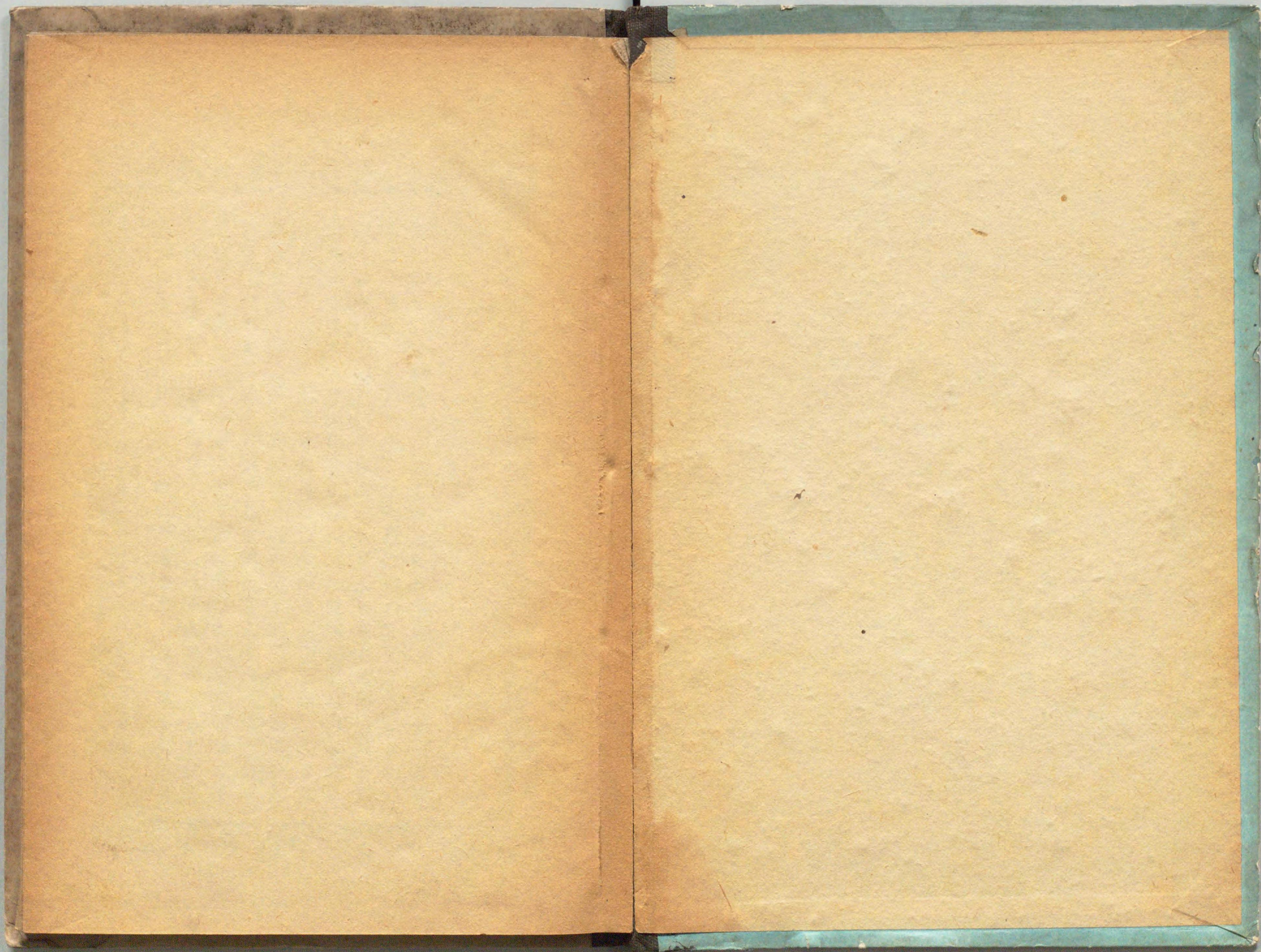
身教育

生徒演說

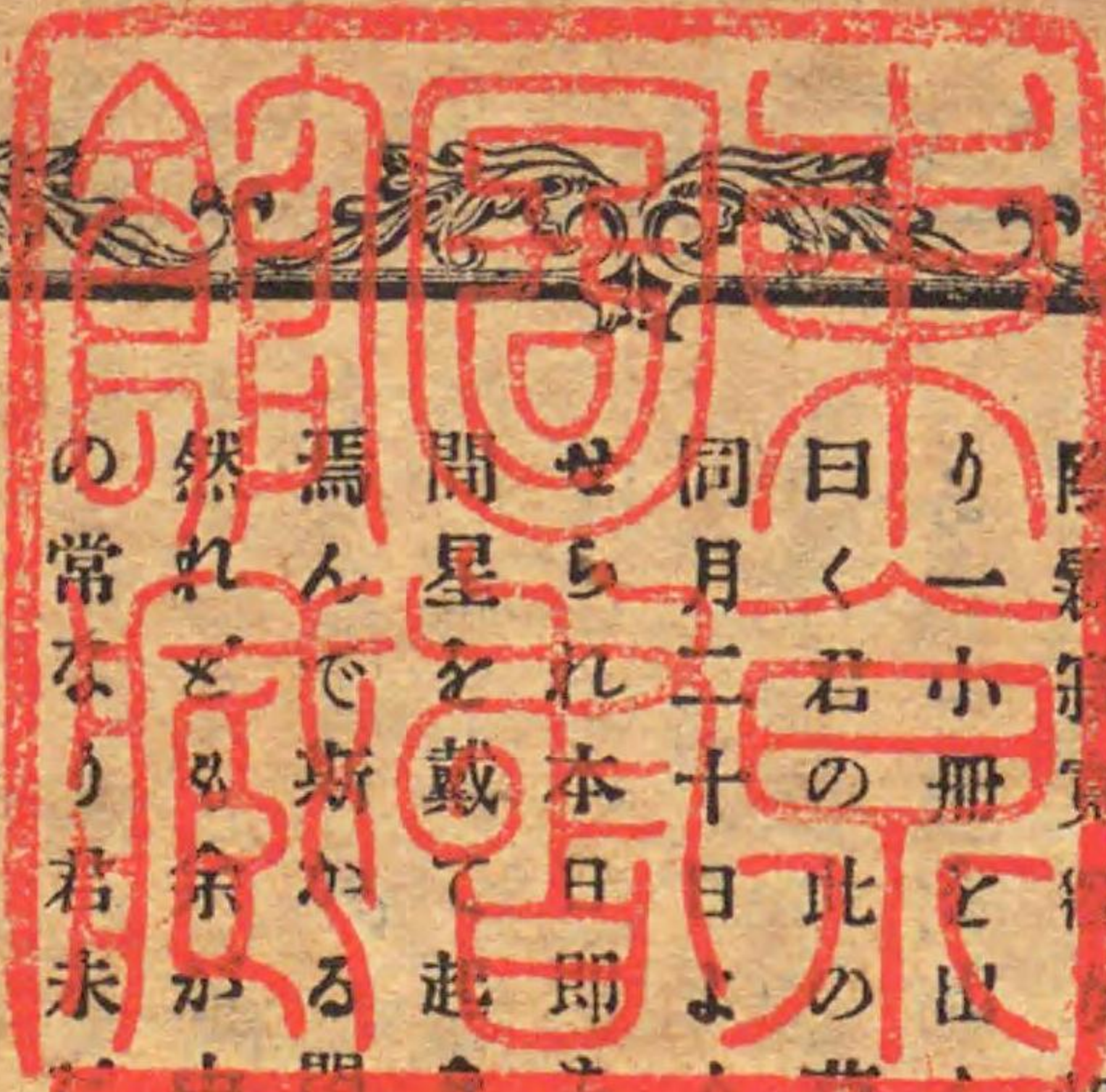
体操論

女子教育





No 4017/23



序

陰霖寂寛編 机邊に痴坐し無聊極れり適々友人松本君來り一小冊を出し余に囑し之を校訂せんとす余大に驚いて曰く君の此の草を起すは去る二月上旬なりと聞く然るに同月二十日より伊達郡各小學校定期試験調査委員に撰拔せられ本日即ち三月廿八日を以て漸く其局を結びたり其間星を戴て起き月を踏で歸り終日營々其職務に勤勞せり焉んで斯かる開文字を弄するの違ありしや曰く眞に然り然れども余が十年書生の列に加はりし以來窃み勉強は予の常なり君未だ予を知らずや且つ曰く此著固より幼童等の爲にせしものにして西諺に所謂少しあるは絶へて無き



に勝るの微意なりと余讀一讀其趣向の面白く字句の解し
易き其名は凡太郎なりと雖ども其着意は凡に非ざるを知
る其教育上に裨益ある或は思ひ半ばに過ん君節を打て曰
く平凡斯くの如き書を以て平凡に非ずとなす兄の眼光亦
た凡に非ず所謂話し下手の聞き上手なるもの歎請ふ書し
て以て序とせよと余筭爾として爲に筆を染む

明治廿三年鳥歌ひ花笑

ふの夕奥州の客舎に於て

不如學子加瀬生しるす

自序

抑も此書は鱈津凡太郎入校の時より修身の來歴を記述せ
しものにて其行爲笑ふべく憐れむべき淺墓の事のみなり
と雖ども予が嚮きに東京府師範學校に在りしとき初學兒
童の修身話しとして大切を奏せし經驗に基つき其の考案
を取り更らに學校家庭社會の三大教育に適用し凡太郎を
して筆陳に非凡の策畧を運らさしめ昔々鬼ヶ嶋征討總都
督桃太郎及び猿蟹合戦の両大將と兎狸の一戦にかちく
山舌切雀をして亡き舌を巻かしめ花咲ちゝ一否頑固ちゝ
ゝをして鼻をあかしむ可く公務の餘暇匆卒に著述せしも
のなるが故に字句の拙きは勿論卑近の誹りを免れざるべ

しと雖ども其の卑近は却つて小學兒童車夫馬に至る迄
 何人にも讀み得べく讀み得て解し得らるべきの幸福とな
 りぬべし果して然らば此書は兒童の師父且つ其の師父の
 師父たるは勿論社會一般人民の師父たるべし豈管一局部
 の人のみに限らん故に將來の新日本を造作する者は即ち
 此著者たるべしとの自慢は却つて看官の評判に若かずと
 爾か云ふ

明治廿三年三月

福島縣伊達郡保原曙樓上に於て

壓扶將軍誌

特19
695

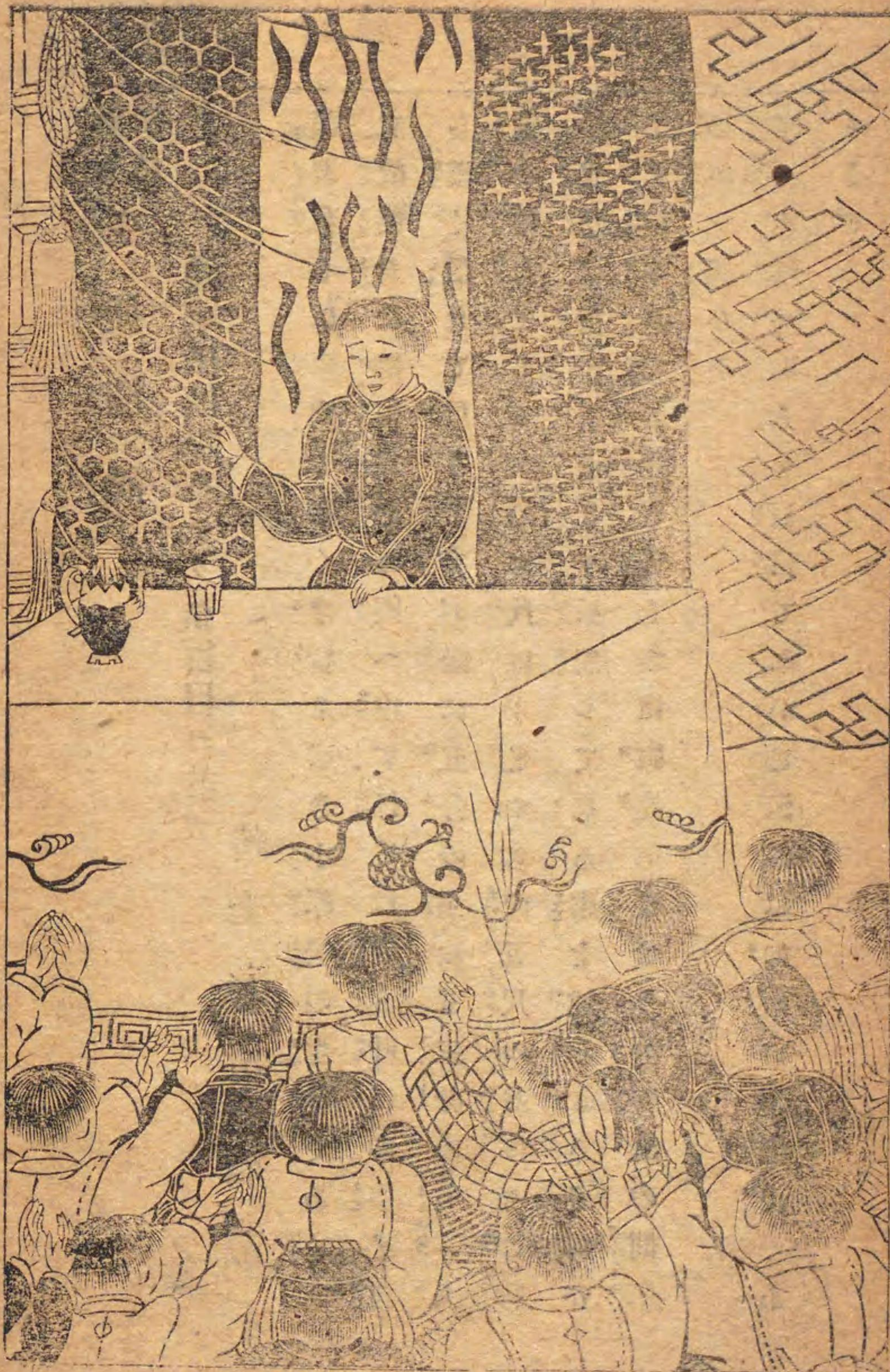
新話 生徒演説

●塙檢校眼ハナク俱盲目ニ非ズ

辨士 杉山 勉藏



諸君私には學問もなく才智もなき小學校の生徒でありま
 す故諸君に御満足をお與へ申す杯とは逆も叶はぬ事と自
 ら確く信じて居りますが諺に五分の虫にも三分の魂一人
 前の牛肉にも「ゴブ」のお代はりどやら此五尺の身体も亦聊
 か思想に富んで居ります故思つて居る事を述べようと思ひ
 ます何卒諸君お聴き苦しうは御座いませうが暫時の間御
 心棒を願ひ升
 倍目の見へぬ人を盲目でないと云ふは如何いふ理由であ
 りませう



塙檢校自_レ名盲者_ニ非_ス 年士 杵山 勉藏

言_ヒ啞者 年士 大石 力之助

御茶漬_ニ香_ノ物_ヲ御馳走 年士 小林 桃太郎

世界第一_ノ豪傑_ハ誰_ゾ 年士 松本 藤吉

明盲_ト言_ハ啞_ト何_レ力多_キ 出題者 曾我 五郎



抑も目玉は圓々として鷹の如く眼光炯々として人を射る
が如くなるも廣い世間には字も見へず本も讀めず手紙も
書けず算盤勘定も出來ぬ者があります豈悲しひとでは有
りませんか不憫な話では有りませんか此様な人たちは明
き盲目と云ひます之と反對で縦令目は見へぬとも本も讀
め字も書き其他凡ての道理を知り居る人は讀み書き算盤
や道理に明らか故決して盲目ではありません
昔し塙保己一と云ふ人は盲目であり乍ら刻苦勉強して遂
に徳川大將軍に擧ぐ用ゐられ和學講談所を主宰する身と
なりました或る夜門人の家にて本の講義最中會々風來つ
て燭火を吹き消したるに依り一坐の者共は燭火を点ける
間だ暫し待ち玉へとひしめきければ保己一は楮てく目

明きは不自由の者なりと云はれました是に由つて之れを
看ますれば講義を聴く目明き共は却つて盲目ではありま
せんか目のない塙保己一氏は却つて目明きでは有りませ
んか嗚呼滿塙諸君はいさ知らず世の明き盲目諸君少しは
此塙檢校に耻ぢませんか

言ヒ啞者

辨士 大石力之介

私しの演題は云ひ啞者と申す題でありますが一休私しは
無學文盲即ち明き盲目であります無氣力無感覺路傍の石
佛や本像がなければお尋ね者で御座います故定めて諸君
が大欠伸なさるだらうと思ひますが暫時お耳を汚します
若しお聴き苦しう御座いますれど何卒お耳にお蓋を願ひ

と云ふとを母様に聞きましたたが之れが本當で有りますれば手と足のある我々ある却つて「コロ」〜「帳」ばつて逃げ出さなければなりませんまい故に私一は上るや否早々演壇を逃げ出します

●世界第一ノ豪傑ハ誰ゾ 辨士 松本藤吉

諸私しの演題は此處に掲げました通り世界の豪傑は誰ぞと云ふ題で有りますが元來商賣道にかしこしとやら呉服屋でなければ反物とは能く分かりますせん養蚕家でなければ養蚕のとは能く分かりますせん馬鹿者には仲々豪傑は分りません然云ふ私しは諸君の様な英雄でも豪傑でも有

りません然るが故に世界第一の豪傑其人を誰ぞと判断するのには此の藤吉の身に取りましては實に此の上もない六ヶ敷きとであります然らば天地開闢の始めより今日に至るまで世界中で誰れが第一等の豪傑かと尋ねますると人は見掛けによらぬ者が彼の油断坊の鱈津凡太郎様であります何と呆れた譯では有りませんか
諸此様な天保錢が何故一錢銅貨はあるか金銀貨幣にも勝るかと云ふ次第は先づ凡太郎一代記を讀た後で無くては解かりません今此の本を一冊宛諸君に差上げますから私の休息中篤とお讀み下さい

新教育 生徒演説

一名凡太郎一代記

目録

- 鱈津凡太郎の身分の話
- 鱈津凡太郎の学校に行く目的の話
- 鱈津凡太郎の学校に行くかぬ日の話
- 鱈津凡太郎の学校へ行く道の話
- 鱈津凡太郎出校して稽古の始まる迄の話
- 鱈津凡太郎修身時間の話
- 鱈津凡太郎放課時間及体操の話
- 鱈津凡太郎放課時間に遊び方の話
- 鱈津凡太郎讀書時間の話
- 鱈津凡太郎算術時間の話
- 鱈津凡太郎食事の話
- 鱈津凡太郎脚晝休みに教場へ派入るまでの話

- 油断坊様作文時間の話
- 鱈津凡太郎習字時間の話
- 鱈津凡太郎家に歸る支度の話
- 油断坊様仕度濟みて學校を出る迄の話
- 油断坊様學校より家に歸る途中の話
- 鱈津凡太郎朝起きて學校に行く迄の話
- 油断坊様遅く學校に着いた話
- 凡太郎清書をすする話
- 凡太郎紙を粗末にする話
- 凡太郎土曜日に留めらるゝ話
- 凡太郎學校から歸る途中徒の話
- 油断坊様遊びに出掛ける話
- 油断坊様遊び方の話
- 凡太郎定期試験を受くる話
- 油断坊様退校させられた話
- 油断坊様着の番する話

て教場を
受く教を
時とく父
母等をの
話を聞
く時
心得

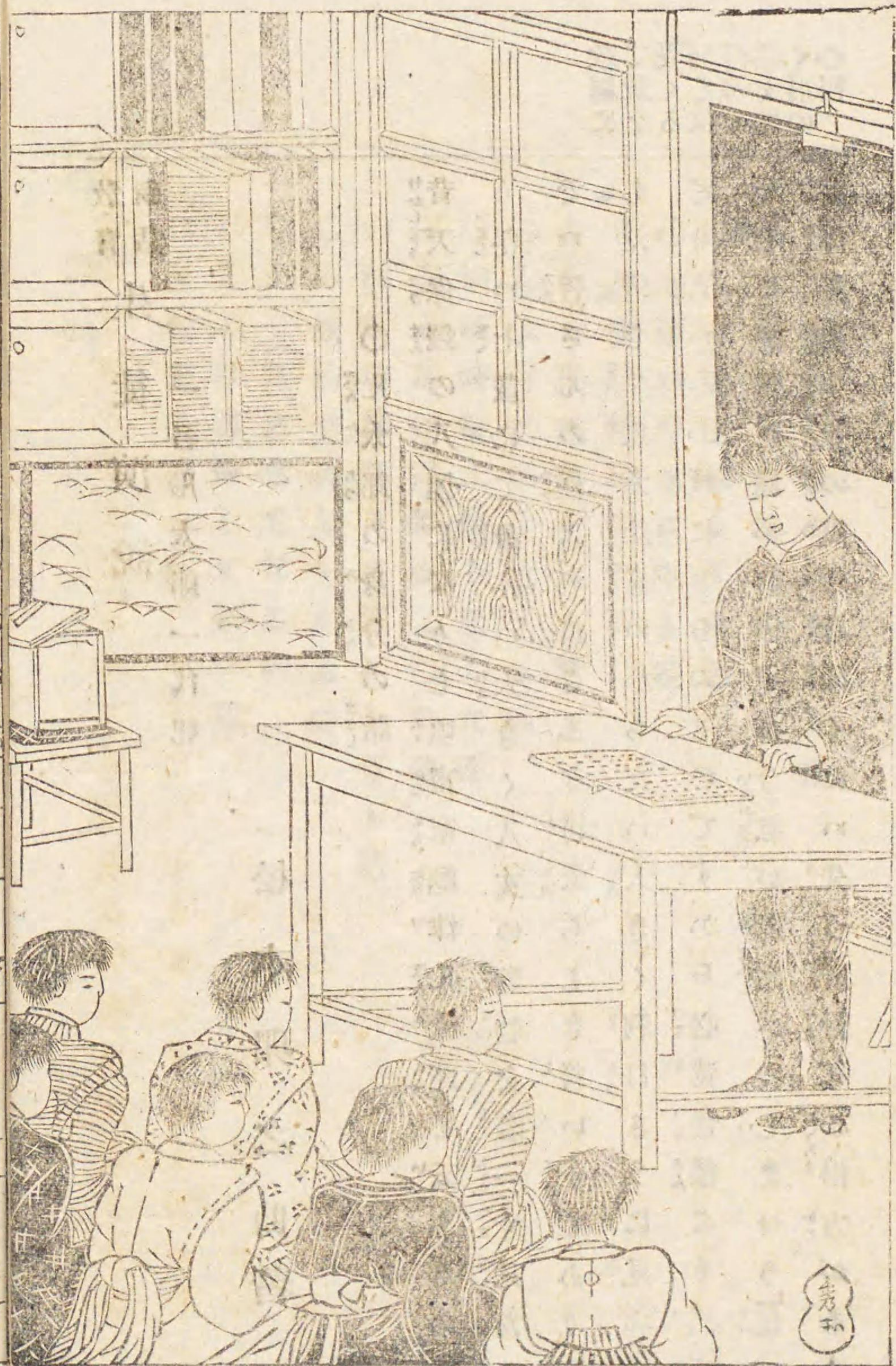
○凡太郎の身分の話
昔天保銭の八厘になりし頃富家鱈津凡太郎と云ふものあり年七歳にて身体大きく八丈の着物を着一寸見た所でん皆さんの様に利口さふな可愛らしき善い子でありました併し此凡太郎様からだの大きく利口さうに見ゆるども人みかけによらぬものですから必竟皆様より馬鹿か利口か善い見か悪い見か今私が御話いたしませう總て父母其他先生の御話を聞くに先づ肝腎な心得方があり

新教育生徒演説
一名凡太郎一代記

松本卯之助著

目錄終

- 凡太郎飯釜の火を焚く話
- 油断坊様使ひをする話
- 凡太郎喧嘩をする話
- 油断坊様水に溺る話
- 油断坊様臆病の話
- 凡太郎虚言を云ふ話
- 凡太郎約束を違へる話
- 油断坊様土瓶を毀した話
- 凡太郎の父母の死亡した話
- 油断坊様盗人に道入らるゝ話
- 油断坊様火元をする話
- 凡太郎乞食となる話
- 凡太郎後悔して死ぬ話
- 是輪賢太郎の話



生芳和

生徒を
して整
肅なら
しむる
法

學校へ
行く目
的

勉強の
幸福を
生むる
母

ますそれの別に六ヶしきことでのありませぬ皆様が教壇
に居て先生に教を受くるとき何時も身体を眞直にして
自分の席の中央に居て膝に手を置き開して外見をせず無
駄話をせず外の事に氣を取られず能く黒板の方に向ひ
て皆様と先生と相視をして居ります相視に負けていなり
ません又父母の御話を聞くにも先生の御話を聞く様に慎
で聞かねばなりません
○凡太郎學校に行く目的の話
又手此凡太郎様も感心に皆様の様に毎日辨當を提げ本や
石盤等を携へて學校に参ります何が故學校へ行くであり
ませう(日本卓治)それの本を讀み字を習ひ算盤を覺へて物
の勘定を遣り開して世間に用ゐらるゝ利口な賢き人にな

四

りに行くてあります(松本先生)皆様の何故學校に参ります
か(日本卓治)私共も矢張り利口になるに來のであります(松
本先生)如何すれば利口になりますか(日本卓治)本を讀み字
を習ひ物の勘定を覺へ其他總ての道理を覺ゆるからであ
ります(松本先生)誠に左右であります此凡太郎様も利口に
ならずと思つて學校へ行くだであります併し只學校へ來
たどてうかうかして居て物に注意せねば利口になられま
せん讀み書き算盤に勉強せねば賢き人になりなれません
西洋の諺にも勉強の天稟の才に勝ると云ふことがありま
す是の生れつき馬鹿なものでも勉強すればうまれつき利
口なものより勝りて利口ものになると云ふとてありま
す

五



五

雨や雪の日の席す
欠の日の席す
べき日
にあら

凡太郎の學校に行かぬ日の話
 凡太郎様が學校に行くの只今皆様が御話の通り利口に
 なる爲めで利口になるの我が身の爲め兩親の爲め國家
 の爲めでありますか兎角勉強と云ふこと余り好きで
 なくて雨の降る日や風の吹く日や雪の降る日に欠席す
 ることが度々ありました全体風の吹く日や雨や雪の降る
 日の學校に行くおと出来すまいか卓治否出来す先
 生夫れなら何故學校に来ないので有りませう卓治馬鹿な
 あの怠ものだから有りませう先生皆様の雨や雪の降る
 日に學校に参りませんか卓治私の雨や雪それらの爲め
 道が悪くとも學校の休みません休まずに勉強すれば後
 の利口な賢き人になられますそれのさき何ぞ先生の御

幼き時
怠れば
老ひて
後悔ゆ

話で承知いたしましたから欠席なく勉強するが誠に
う御座います(先生)夫れに感心な御心掛であります皆様の
誠に利口な御兒たちであります決して凡太郎様の様な眞
似りなさいますなあの様に欠席をなさいますな欠席して
怠ると利口な人になり迎もなられませんぞ
○凡太郎學校へ行くと道の話
皆様の凡太郎様の様に雨の降る日や風の吹く日なれ
ばとて學校に行かぬの悪いと云ふ事をばお合点になり
ました故是れからの凡太郎様が學校へ通ふ途中の話を致
しませう
凡太郎様が一日學校へ出掛けると其途中で石に躓き拵指
の爪を剥がしました開して凡太郎様の石が斯様な所にあ

途中の
注意

るから悪いのだと石に小言を云ひました若し石に物が言
へればそれの私が悪いのでなくて御自分が能く氣を附
けて御歩行なさらぬ罰でも中たので有らうと申しませう
又その先きへ進み行きますと今度の空に鷹が啼て舞ふて
居るのに氣をとられ餘り空を眺て歩きました故堀の中へ
さんぶと落ちて足の脛を傷け堀が此様な路の中央にあるか
ら悪いのだと堀に小言を云ひました皆様是れ全く堀が悪い
いのでありませうか凡太郎様が氣を附けぬのが悪いであ
りますか又今度の犬の尾を踏みました故犬が凡太郎様の
足を喰付きました又凡太郎様の犬が斯様な所に居るか
ら悪いのだと小言を云ひました此時犬の平氣な顔付で凡
太郎様氣を付けて御歩き君斗り通る道で有りませんと

此處の時多問の
答の多問の
き開
發の授
法の一
端を示
りせるな

云ひさうな振りをしてしました凡太郎様の痛いのには堪り兼ね
泣々々学校へ行て其譯を先生に申したれば先生にたいそう
叱られまして皆様の今凡太郎様の話を聞て先生の叱るの
が悪いと思ひますか夫れども又凡太郎様が悪いと思ひま
すか(卓治)凡太郎様が悪いと思ひます(先生)凡太郎様が何故
悪いと思ひますか(卓治)凡太郎様が氣を付けて歩行かない
からであります先生(先生)の叱るの悪くありません(先生)若
し氣を付けて歩けば怪我を致しませんか(卓治)左右であり
ます(先生)皆様が毎日學校へ來るのに怪我をしないの何
故であります(卓治)氣を付けて歩行くからであります(先
生)此様に凡太郎様が油斷して歩行て若しも馬に踏まれ又
荷車や人力車や馬車や瀛車に敷かれたら如何成ませう(卓

梨下に
冠を正
さず

治)左右すると直ぐに死にます夫れでなくとも大怪我をし
て不具者になります(先生)夫れなら道を歩行くとき如何し
て歩行けば宜しう御坐います(卓治)放心せず(先生)氣を付け
て歩行けば宜しう御坐います(先生)なるほど其れも大切な
心掛であります(先生)其外にもまた心得ねばならぬとがあり
ます(先生)田畑に石を投ぬ入れ(先生)又(先生)犬をけしかけ(先生)又(先生)無益に路
傍の花を折る等(先生)の慎む可き事であり(先生)ます(先生)況して他人の家
敷中にある菓實などの覗くも(先生)立ちよるも(先生)宜しくありませ
ん(先生)古への賢き人の教にも(先生)瓜田に履を納れず(先生)か(先生)梨下に冠
を正さず(先生)など云ふ(先生)ことが(先生)あります(先生)是(先生)人(先生)に疑(先生)を受(先生)くる(先生)様
な場所(先生)に(先生)近(先生)寄(先生)ら(先生)ぬ(先生)こと(先生)を(先生)戒(先生)め(先生)た(先生)詞(先生)で(先生)あり(先生)ます(先生)

○凡太郎出校して稽古の始まる迄の話

生徒の出校の心得

凡太郎様の學校へ来て行厨を扣所へ置き本を席に入れ
動場に出て多くの朋友に御早う御坐いますと禮をして少
し遊ぶと析木ががちかちか鳴りました未だ析木が鳴り終へ
ぬ内に直ぐに尋常一年級の生徒も他の級の大きな生徒も
一寸の間に皆並で能く揃ひました故先生の右へ準へと云
はずに直ぐに右へ向け「右と云ひましたから生徒の皆揃
て右を向きますと直ぐに又先生が前へ進め左右一二と
号令を掛けますと凡太郎様も左足から先きに歩行き初め
て教場へ派入り先生に禮を致しました
○凡太郎修身時間の話
凡太郎様の御話を聞き乍ら何か下を向ひて手や足を徒を
して居て先生に叱られますと凡太郎様の先生是から致し

教師の生徒を引寄せ、心を得る

生徒の徒らを防ぐ話

ませんから勘忍して下さいと云ひました「又少し過ぎると
勘定の時間でもなく御話の時間だの上に上を仰其ひて天井
の板を一枚二枚三枚と勘定をして居て又先生に叱られま
した今度も凡太郎様の先生是から吃度致しませんから勘
忍して下さいと云ひました「皆様よ朝の御話の時間に斯
様な事をして居て善い事と思ひますか悪い事と思ひます
か夫れとも亦あの凡太郎様の利口な子と思ひますか馬鹿
な兒と思ひますか(卓治)悪いの申すまでもなく馬鹿な兒だ
と思ひます(先生)何故馬鹿な兒でありますか(卓治)御話の時
間に徒らをして居て利口になるとを知らなから馬鹿で
あります(先生)皆様の以後も以前の通り御話の時間に外見
や話や徒らなどを致しませんか(卓治)致しません(先生)吃度



家庭教育の効

運動及体操の効用

生徒を引き出す時の心得

致しませんければ皆様の誠に利口なものであります
 夫れから御話が終ると丁度析木がなりました故先生が
 二三左右を云ひましたら皆様が足も身体も揃へて静かに
 運動場へ出て遊びました
 ○凡太郎放課時間及体操の話
 皆様よ凡太郎様の御稽古が終ると何故運動場へ出て遊ぶ
 て有りませう(卓治)先生が遊ばせるから有りませう(先生)先
 生の何故遊ばせるて有りませう(卓治)私の母様に聞きました
 たあの少しも遊ばないで勉強しなると病気になる故御
 稽古するときは能く先生の云ふを聞いて外見もしない
 て雑話もしないで一心に御稽古をして開いて遊戯の時に
 も一心に遊ぶが身の養ひになりますと聞きました(先生)話

生徒の遊び方

治様あなたのお母様の宜いことをあなたに教升た開してあ
なたの夫れを忘れないで能く覺へて居ました誠に左右で
あります夫れだから學校での体操も教へます今に体操の
時間に体操をして身体を健康にするであります若し身体
が弱ければ何をすることも出来ません命あつての物種と
云ひし諺の眞に尤のあとであります

○凡太郎放課時間に遊び方の話

凡太郎様の遊びを見ますると壁や塀に無駄書をしたたり棒
を打ち振り石を投げ砂を時き木に上り井を覗くなどの遊
びを好みます卓治さん凡太郎様の遊びに付てどんなお考
がおりますか(卓治)あの壁や塀に濫書をする壁や塀が汚
れます故遊で居るときに地に書くならば宜う御座いませ

家庭教育の効然なり

又棒を振りたり石を投げたりすると人に怪我を爲せな
り硝子を破損す様なおどが有りますから悪う御坐います
又砂を持くと衣服やあたまが汚れたり又た眼に派入ると
誠に困ります又井を覗くと危い危い遊びの悪い悪い遊び
をして遊ばないが善いと母様に教へられました(先生)あな
たの何時も能く出来ます開してあなたの母様の誠に良
母様だから善い事を教へました

○凡太郎讀書時間の話

讀書法の一掃

讀書物の時間に先生に今日教へらるゝ所の御話を聞き夫れ
から六つク敷本字も覺へ先生の仰にて皆々本を出します
るときに凡太郎様の右の手を舉がました故先生が凡太郎
様何の用でありますかと云ひますと凡太郎様の席の傍ら

生徒教
場に於て
言のん
どする
時の心
得

善を爲
す尤も
樂し

に出で静に先生私が今朝持て来た本がありませんと云ひ
ました所が先生あなたの本を取る様な悪いことをする
りません誰も此中に人の本を取る様な悪いことをする
見の有りますまいと云ひました左右すると凡太郎様と全
じ級ののもので是輪賢太郎様と云ふ子がありまして先生私
の善い云をするのが樂しう御座います私も凡太郎様に探
して上げませう凡太郎様泣かないで席の中を能く御見な
さい其石盤の下に有りますせんか凡太郎様ありましたと
云ふて探して遣りました皆様の此御話を聞て如何思ひま
すか(卓治)七度探して人を疑へど云ふ事がありませう夫れを
凡太郎様の様に能く見もしないで矢鱈に何か亡くなつと
なごい云ふのの悪いと思ひます(先生)夫れで何か品物が

品物の
見ぬ
時の心
得

考へも
念に念
を入る
可し

一人で
全生徒
の妨害
をなす
深く慎
む可し

見へない時の如何いたしたら宜しう御坐いますか(卓治)何
でも物に念に念を入れるが宜しう御坐います夫れだか
ら本が亡ければ能く念に念を入れて探して見るが宜しう
御坐います又考へるも念に念を入れて能く考へるが
宜しう御坐います(先生)誠に卓治様の云ふ通りであります左
右能く氣を注れば何事も仕損じの有りません
且凡太郎様が能く探さないで其様なあとをした故全級生
徒の御稽古する時間を無駄に費し其時間には先生も本を
何時も教へる程致へることの出来ませんでした(卓治)本を
探して居たからであります夫れだから此中でも私たちが
の餘程氣を注げなければなりません若も其様なことがあ
ると折角皆様が辨當を提げ學校に来て利口にならうとす

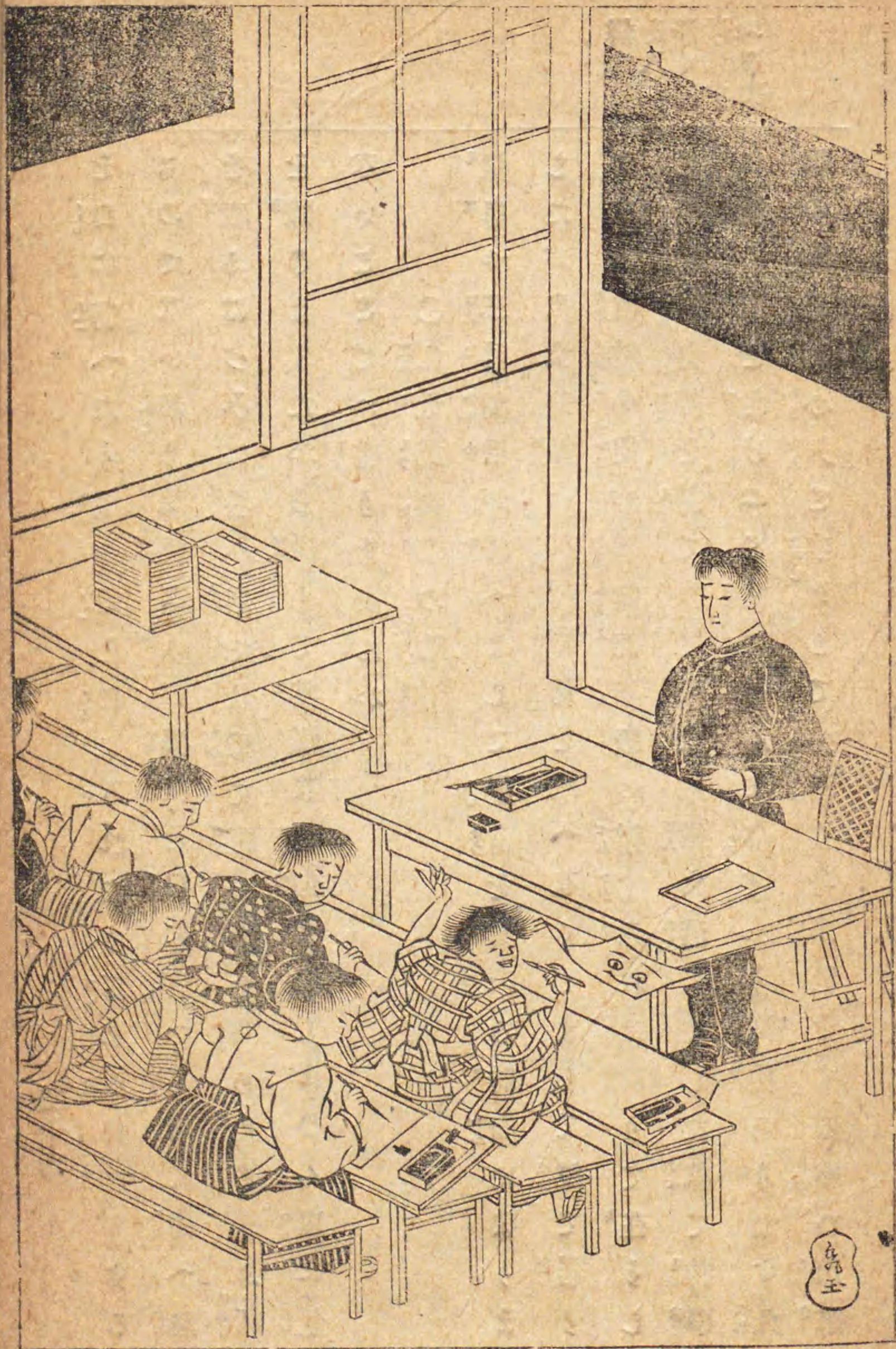
生徒本
を讀む
時の心
得

知らざ
るを知
せよ

る邪よこしまをすする譯わけ故ゆゑ慎しむしむべきことでありませ
 夫それれから皆みな様が其その日ひ讀よむ所ところを開ひらいて本ほんを手てに持もつと先生
 が讀よめる人ひとの手てを御お上あげなさいと云いひましたら凡なん太郎様
 も賢けん太郎様も其その他ほかの生せい徒とも手てを上あげました故から先生が凡なん
 郎らう様御お讀よみなさいと云いひましたから凡なん太郎様らうが席せきの傍たはに
 出でて讀よみ初はじめると支つへて讀よめませんでしたら凡なん太郎様らうが席せきの傍たはに
 の先生せんせいに讀よめる人ひとの手てを御お舉あげなさいと云いひれた時ときに手て
 を舉あげ乍なら讀よめなくての虚う言ごを云いふて先生せんせいをだますと同おな
 じ譯わけで誠まことに悪わるいふとてありませす私わたくしたちの讀よめなければ決けつ
 して手ての舉あげません知しらざるを知しらずとせよ是こゝれ知しるな
 りとの賢けんき人ひとの教しへにありませすとやら是こゝれ先せん日じつ先生せんせいの御お
 話わありしを私わたくしの覺おぼえて居ゐりますら先生せんせい其次つぎに賢けん太郎様らうの讀よむ

凡なん太郎
先生せんせいも

番ばんになりませす是こゝは輪わ賢けん太郎様らう丈だけあつてすらすらと建た板いたに
 水みづの流ながるゝ様ように讀よむと志しまひました其そのとき凡なん太郎様らうの本ほんを
 礎いしと落おしましたから見みれば凡なん太郎様らうの居ゐ睡ねをして居ゐて机つくえ
 の角かどに額ひたいを打うちつけたと見みへ吃びっくりしてねぼけ眼まなこでしかめ
 面おもてを下さげあゝ痛いたいわゝ痛いたいと云いひ乍なら額ひたいを撫なつて居ゐりま
 して先生せんせいに大たいへん叱しられましたら卓たく治ぢ凡なん太郎様らうの仕し舞まひに
 如何いかな人ひとになるでありませう
 ○凡なん太郎らう算さん術じゆつ時じ間かんの話わ
 今いま度ど三さん時じ間かん目めに算さん術じゆつの御お稽けい古このとき凡なん太郎様らうが右みぎの手てを
 舉あげました故から先生せんせいが何なんでありませすかと云いへば凡なん太郎様らう
 先生せんせい石せき筆ひつが落おちましたから取とつて宜よろ御お座ざいませすかと云い
 ひました故から先生せんせいが御お取とりなさいと云いひませす又また直ちかに石せき盤ばん



得時し怪生
のた我徒
心るをの

可てに口な錢
ら遊入やどや石
ずぶれ耳を

拭が落ちましたから取つて宜う御座いますか又今度の石
盤を落して破損して仕舞ひました故先生に大さう叱られ
まして家に歸りても定めし父母に叱られるてありませう
左右あうする内今度の凡太郎様が俄かに聲を擧げてワ
ンワンワンと犬の様に啼き出しました故先生が糺します
と凡太郎様の只啼て居る計りで何をしたらやら解りません
側の賢太郎様が申すに凡太郎様の先から石筆を耳に入
れたり出したりして徒をして居りましたからと云ひまし
た其處で凡太郎様が遂誤て石筆を耳の中へ押し入れたと
云ふ事が知れました故先生の直ぐに御醫者様を呼び石筆
を耳から出させました(卓治)私のあの凡太郎の話聞きま
すと面白く可笑しくあります私の母様に箸の様な長き物

家庭教
育の効

を口に啣へたり錢や石を口に入れたり耳に入れたりする
ものでない昔も馬鹿な人が楊枝を口に啣へて居て内へ息
を吸ふはづみに呑み込で仕舞て腹の中を痛めたど云ふ話
を聞きまゝしたから決して其様な真似も致しません眞に危
ないことでの有りませんか

○凡太郎食事の話

最早や三時間目が終へまして辨當を食べる時間になりま
したが凡太郎様の又辨當箱を見へなくしまして泣いて居り
ますと其時小使が尋常四年級の辨當入れに残りて在りし
とて其辨當箱を持って來て凡太郎様に渡しました總て物事
に能く氣を付けぬと常にゐんな事ばかり澤山あります此
等の人を放心人と申まして生涯立身出世をする事出来

辨當箱
を入れた
るに注意
すべき事

生徒辨
當を食
するに
得べき
心得

教師生
徒の辨
當に湯
を注ぐ
心得

食事の
心得

ません夫れから間もなく生徒一同の各辨當を席上に置き
先生に禮をして各茶呑茶碗を席より出し席の上の端に置
き辨當箱を開いて食べ初めますと先生の生徒の左の方の
端から生徒の後の方へ湯をついで行き少し左へ折て其次
の机の間を前の方へ湯をつぎ乍ら歸りて参ります内
凡太郎様の茶呑茶碗を手を持ち頻りに湯を早く下さい湯
を早く下さいと呼びました(卓治)其日の左の方より湯をつ
いであるく番で明日のまた右の方からつぐ番で有りませ
う夫れを凡太郎様の何故待て居ないのでありますや大人
しくありませぬ(先生)夫れから凡太郎様の辨當を食べ
るのに湯や飯をこぼし着物や机を汚し口吻に飯粒を着
けて口を聴きたり外見をしたり又立て食べたり歩行き乍

怠りも
の食と
遊びを
急ぐ

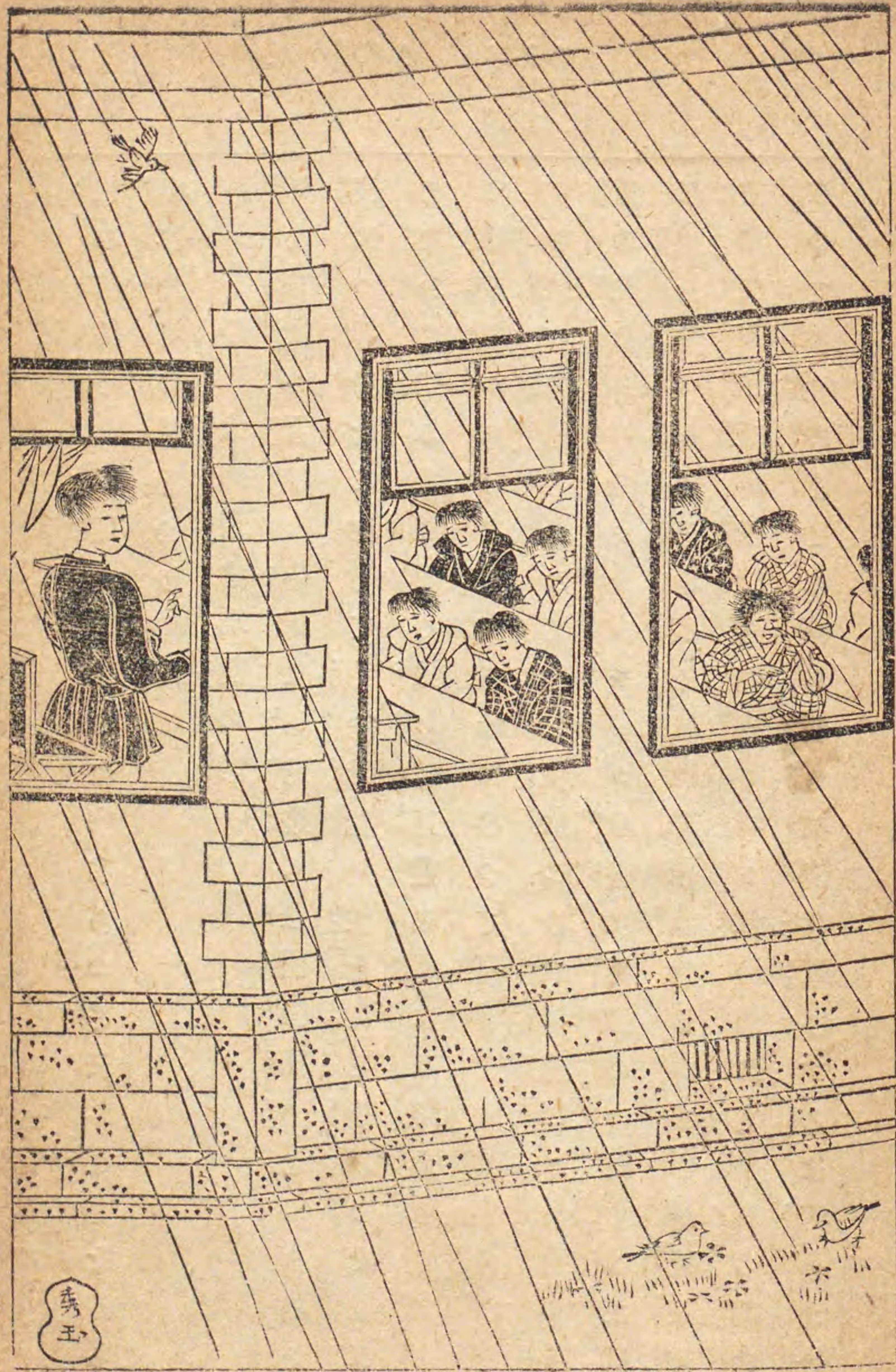
食事後
の心得

生徒教
場へ派
入る時
の心得

ら食べたりして居りました(卓治)私の乞食が其様な事をし
て食べるとのを見たあとがかりました(先生)凡太郎様の先生
最上皆が辨當が濟みました何故遊びに出ないのでありま
すと云ひました(卓治)を食べて直ぐと運動したり湯
に派入りたりすると胃袋の食べた物が消化れないで毒だ
から十分斗り休で遊びに出るのがよろしくありますとさ
○凡太郎御晝休みに教場へ派入る時の話
多くの生徒が己に辨當が了へて遊んで居ると程なく授業を
始むる析木がカチカチ鳴るを合圖に皆列を造ましたのに
凡太郎様の油断して居て賢太郎様に呼ばれ吃驚して駈け
て来て列に加りました夫れから先生が右へ一進めなど云
つても右へ進め様子もなく右向け一右前へ一進めなどの

油断坊
の名を
付けら
れぬ様
よと心
得

号令がかつても油断して居りました左右の聲と共に皆
様が歩行だしたので始めて気が付き凡太郎様も進み始め
ましたたが間もなくあれ先生草履が片方脱けましたあれ又
片方脱けました賢太郎様あなたに突き當りました御免な
さい杯と舌饒乍ら教場へ派入りて席に就く時に一二三と
謂ても凡太郎様の油断して教場の隅の方を見て居りました
た故其級の皆様も呆れ果て終に凡太郎様に油断坊さんと
云ふ綽号を付けました
○油断坊様作文時間の話
先生が片假名で「アレンセンセイザウリガカタカダヌクマシ
タ」と御書き成さいと云ひました故賢太郎様等ハ一心に書
て居りますのに凡太郎様の硝子窓から外を透し見てあれ



秀玉

聞へぬ 云ふ かつ といふ かつ 逃り口 上のかい

あれ雀が下りた一羽二羽三羽また一羽飛で来た雨が降て
 来て遊ぶに困る雪になればよい雪達磨を拵へやうのにな
 ど、心の中で思て居りましたから先生の書けと云られた
 事が少しも耳に入らなくて先生何と書くのであります聞
 へませんでした最う一度願ひます(卓治)凡太郎様の聾と油
 断坊は聞あへませんと書いたら宜う御座いましたらうだ
 が其學校の窓が障子でなく硝子窓なら何故此學校の硝子
 窓の様にペンキが塗てないのでありますせう夫れでなけれ
 ば硝子窓の下の一枚の硝子に紙を張つたら宜う御座いま
 せう夫れから凡太郎様の作文の御稽古が終へて石盤を仕
 舞ふどきに机の蓋を「ヒドク音をさせました(卓治)凡太郎様
 の常々先生に教へられてあるあの書籍や器械の丁寧に取



字を習ふ時の心得

墨汁を磨るの心得

扱ひ戸障子の開閉の静にせねばならぬと云ふことを打ち
 忘れたてありませう

○凡太郎習字時間の話

凡太郎様の習字の時間に何時迄も愚圖愚圖墨を磨るので
 終にの墨汁をまぼして手や着物や机を汚し手習ひを顔に
 したかと思ふほど黒く染めて荒熊の様になりまして丹
 て御草紙のもめて皺だらけになつて居ります又手習ひを
 するにも身体を曲げて腕を机につけ筆の穂のきはを握り
 指の先き斗りでチヨコチヨコ早書に蚯蚓ののたくつた様
 な跡を拵へ又墨汁を多く筆に着け過ぎるから字が滅茶苦
 茶になり草紙が三枚も四枚も一ト筆で濡れて明日の朝に
 なつても乾きませんから明日又御手習ひするに困りませ

教師の折々生徒の徒中の注意すべし

生徒の歸す時心の得

生徒の支度する時心の得

う開して時々乾さなり「ブシャウ」ものだから机の中が臭ふ
御座いました(卓治)私の先生に教へを受けました通り御草
紙の時々乾かしますから時々先生の御覽の通り机の中に無
の掃除を致しますから時々先生の御覽の通り机の中に無
駄なものもなく奇麗であります凡太郎様の様なあどをし
て置くも夏なら虎列刺病の御やどになりませう

○凡太郎家に歸る支度の話

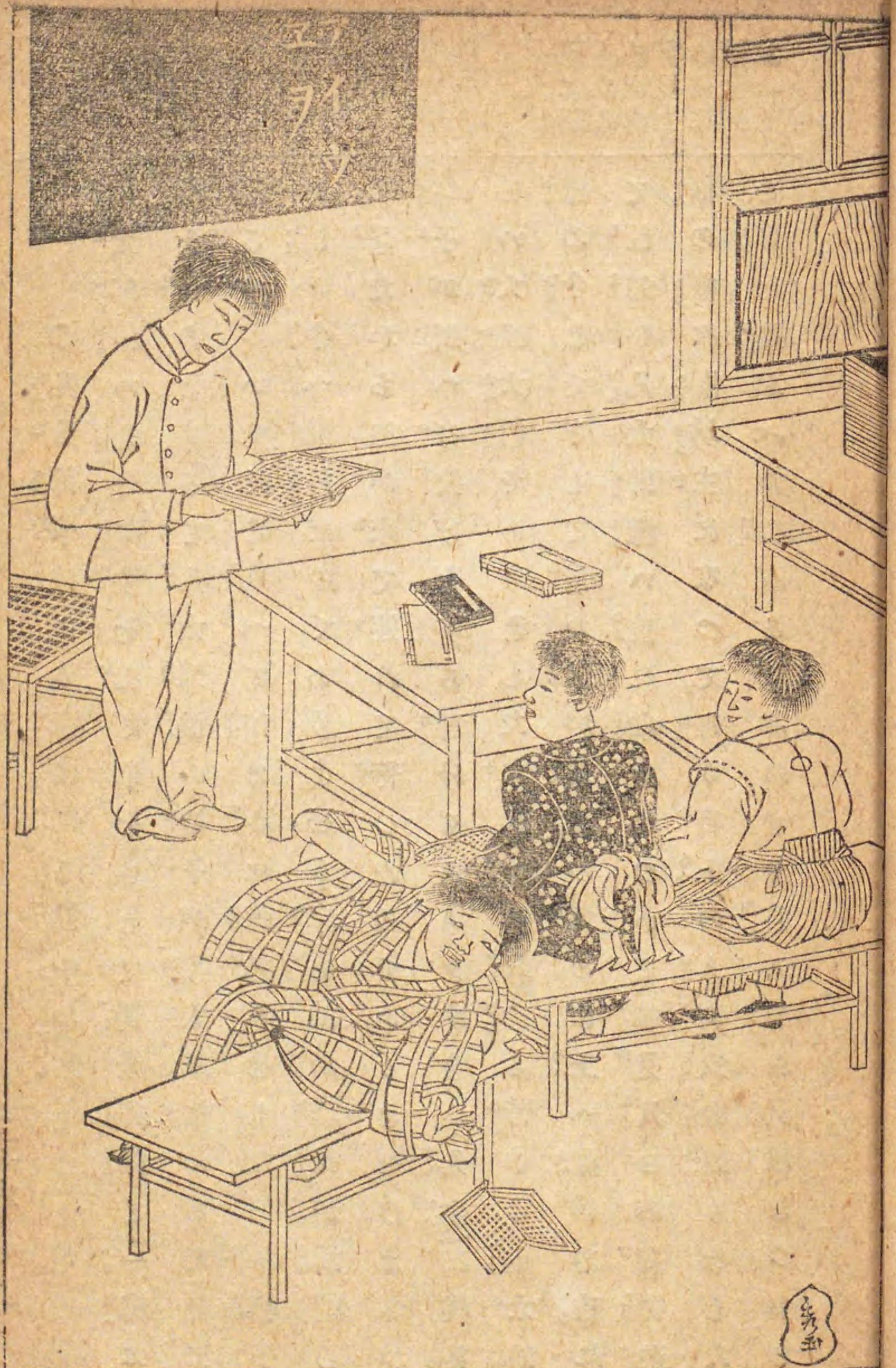
己に稽古の時間終り析木の聲と共に一同我が家に歸る支
度を調ひ風呂敷包や辨當箱などを机の上に置き正しくし
て居る内先生の第一に生徒の身体を見ますと凡太郎様
の着物の前の合せ目が開て居りましたして學校の生徒に不
似合ななりかたちでありました次に先生の徐かに生徒の

生徒の家へ歸ると時得る心の

荷包みなどを調ぶると凡太郎様の本を圓めて包みました
から能く包み換へさせました次に多くの生徒の顔を見ま
すると凡太郎様の墨だらけなつて其上鼻汁を垂らして
口を開き丁度神樂の土用干の様であります又先生の生
徒一同に手を舉げさせ指を延ばさして掌を見ました所が
掌も墨だらけで烏猫の手の様でありますましたが先生の仰せ
で鼻汁もかみ顔も手も洗ひました

○凡太郎仕度濟みて學校を出る迄の話

己に生徒一同仕度も濟たる故揃て先生に禮をなじ一の令
にて立ち二の令にて其儘坐側へ出で三の令にて左の足よ
り歩行き初めると凡太郎様の賢太郎様の背中を押したり
何か御饒舌をしたり高く足音をさせ前の人の足を踏みな



此の如く此の如く此の如く
 生徒に如く生徒に如く生徒に如く
 歸すに如く歸すに如く歸すに如く
 不速の如く不速の如く不速の如く
 駄下駄の如く駄下駄の如く駄下駄の如く
 雑沓の如く雑沓の如く雑沓の如く
 しる可くしる可くしる可く

として終に先生に叱られました夫れから昨日の末席の方から四五人
 位宛順々に下駄を穿いて歸りたる故今日の一番の方から
 四五人位宛下駄を穿き學校を出てますとき凡太郎様の番
 になりますと大急ぎで下駄を捜せども見へず泣き顔にて
 きよろきよろして居りました故賢太郎様が夫れを見兼ねて
 尋ねてやりますと自分の名札のある所になくて隣の欠席
 した朋友の下駄を置く場に置きました(卓治)なぜ凡太郎様
 の御自分のものをろの様に見へなくするで有りませうか
 して又賢太郎様の何時も親切な人でありませぬおの
 つどやにある四つどや良き友撰びて交われよ良
 き友良き師の身の守りくどの感心な歌でありますね

家に歸るに
時を必
ず長上
の禮を
おべし

○凡太郎學校より家に歸る途中の話
凡太郎様、急いで學校を出て傘をさして賢太郎様と一緒に
途を歩きます。凡太郎様の帽子が凡太郎様のあたまに
居るのがいやだと見へて川の中に飛び込みました。何故帽子
が川の中へ飛んだのでありませう(卓治)油断坊様が油断し
て居たから風が来て連れて行つたのでありませう。さか
帽子が川へ身投げをする譯けもありません(先生)左様其
日の大風大雨でありました。夫れから又少し行くとい
様の今までさして居た傘が暴風の爲めに上へ開いて破れ
て仕舞ひ凡太郎様の破れ傘をかついて四月八日の御釋迦
様の様に濡坊主になつて歸り目上の人に只今歸りました
と禮を述べべき筈なるに其れをも打ち忘れ只泣きつら

帽子及
傘を被
り道を
歩む時
の卓治
の答す
如くす
べし
朝起の
時刻の
小鳥の
劣るな

下げて居りました。ほんに泣きつらさを蜂がさすと云ふ通り
母様に大へん叱られました。卓治(是)凡太郎様が油断して
居たから風が吹いて来て傘を破毀したので自業自得だか
ら風に小言を云た所が仕方があります。まい先生皆様の帽
子を被り傘をさして歩行くとき如何して歩けば宜し
いと思ひますか(卓治)油断しないで氣を付けて歩行
風が来たらば帽子を抑ゆるか手に持つかして歩行
少し蓄めて歩行けば宜しいと思ひます
○凡太郎朝起きて學校に行く迄の話
鶏が東天紅々々鳴けば間もなく夜が明け既に夜
が明ければ雀が千代々々起きよと囀ります。其聲を
聞て朝寝をして居れば小鳥にも劣ります。面るに凡太郎様

朝起き
て學校
に出づ
る迄の
心得

の鳥が鳴ても太陽が出て未だ起きず起あされてやつと
のあとで九時半頃にぼんやり起きて周章て、朝飯を食べ
學校へ行てまいりますとも何とも云はず其まゝ家を出掛
けました所が凡太郎様本を忘れて復た本を取りに歸り學
校に來た頃が丁度十一時でありました皆様朝起きるの
が凡太郎様の様で宜しう御座いますか(卓治)今先生の御話
の通り小鳥でさへも何時も時を違へず朝早く起きます况
して凡太郎様の人間でありませ昔の人の譬にも朝起千両と云ふ
氣地のない人でありませ昔の人の譬にも朝起千両と云ふ
ことがありますから私に常に朝の早く起きます若し目が
覺めなければ起して貰ひ起さるれば直に起きます(先生)凡
太郎様の様に朝起れば直ぐに朝飯を食べて宜しう御座い

凡太郎
の行爲
禽獸に
劣る可
く笑む
可憫し

ますか(卓治)否朝起れば先衣服を着換へ蒲團を片付け顔と
手を洗ひ口を漱ぎ長上の人に禮を爲し夫れから座敷や庭
を掃き商家なれば軒簾を掛け又雑巾掛をなし終て飯を食
べ若し朝飯が出来なければ夫れ迄書物を讀て朝飯を食べ
次に學校へ行く用意をなし書物石盤などを取落さぬ様に
と先生に教へられた通りに守ります夫れを凡太郎様の鳥
に負けて起き起きると直ぐに朝飯を食べて猫にも負け
るでは有りませんかなせなれば猫の朝起れば必ず顔を洗
ひますわ
○凡太郎遅く學校へ着いた話
前に御話ししました通り凡太郎様の十一時頃に學校に來ま
した皆様夫れで宜しう御座いますか(卓治)否御稽古の初

出校時
間に後
得る心

まる十分前迄でなければなりません夫れだから御稽古が
八時に初まれば八時十分前迄又九時に始まれば九時十分
前迄學校に行かなければなりません(先生)何故凡太郎様の
遅くなつたのでありませう(卓治)朝寝坊をしたのだうつか
りして本を忘れたのだと道をぶらぶら徒らをしながら歩
つたからであります先生凡太郎様の十一時に學校に來て
直ぐに席に着きました夫れで宜しう御座いますか(卓治)否
遅くなつたら其理由を先生に述べて許を受けて席に着く
のであります夫れを凡太郎様のたまつて席に着いての口
や舌があつても其役をしませんで丁度啞者の様であります
す(先生)又た其日の土曜日でありましたから凡太郎様の二
時間後れました故已に脩身体操讀書の時間も過ぎて御清

時の即
ち金な

書の時間になりました(卓治)昔の一時千金と云ひましたか
今での一時期千金一事千金とも云ひます故凡太郎様の二時
間後れたの二時二千金の損であります又脩身で一事覺
へ体操で一事覺へ讀書で一事覺へ合せて三事覺へますの
を覺へませんから三事三千金の損で都合五千兩の損であ
ります夫れ丈の損をして平氣で居るとい慾のない油斷坊
様噫可愛想てのありますせんか

○凡太郎清書をする話

書き方
の心得

愈々御清書を書き初めまると賢太郎様は直ぐに書いて
仕舞ひて石盤を出して其級で是迄習つた所の御手本の復
習を一生懸命でして居ります而るを凡太郎様の書初めた
けれども字配りが悪いやら文字の間違つたのやらで無駄

生徒をして紙を無駄に用ひしむるをなするに法あり

油断先油断坊の生徒あり

斗りして居て一帖の紙が皆無くなつて最ふ書くことが出
来なくなりまして賢太郎様に紙を一枚かりてやつと書
きました(卓治)凡太郎様の無駄をするの平生油断して習
ふて會々御清書の時ばかり氣を付けて上手に書かふと思
ふても左右甘く行かぬものでありますから悪いには相
違有りませんけれども何故凡太郎様の先生に印を捺して
遣らないのでありませう若し先生が御清書の日に毎に一枚
宛先生の檢印を捺してやり其檢印のない紙なれば書いて
來てもいけないとすれば凡太郎様初め無駄をする人の無
くなること此學校中の生徒を見ても分かるて有りま
せんか

○凡太郎紙を粗末にする話

生徒をして清し書したる紙を保存するに法あり

儉約すべき心得

紙屑も積もれば大金

賢太郎様等先生の命け通り是迄御清書を書いた紙を幾枚
も持て參つて云ふに先生私に此前の二十枚の御草紙にし
ましたが今度も最う此通り溜りましたけれども御草紙の
澤山ありますから是れに家に歸りて父様に上つて此師父
連絡帳に仕掛けて貰つて參りませうと云ひました夫れを凡
太郎様の是迄の御清書に不殘鼻汁をかんだりして一枚も
持て參りませんのみならず己に其日の御清書も直して貰
て直に圓めて仕舞ひました(卓治)昔の人の譬の通り塵も積
れば山となり一滴も溜まれば海となります一枚も貯へれ
ば御草紙にでも何にでもなります又少量の紙も値がする
から一文も積れば千圓になりますれば紙屑も積もれば大
金持になりなす且又假令少しの紙屑たりども其初めの百

紙を粗末にすべからず
由るから理

姓が楮と云ふ木を畑に植へ夫れを培養して成長させ其枝
を刈り取り其表皮を水で洗ひ取り其下の皮を剥ぎて之を
紙漉りに賣り種々の製造法を施して紙となし敷多の人々の
手を経て遠國より來りたるものにて其間人々の苦勞艱難
何程であるか其の汗を溜ても小さき川程になるでありま
せう其御蔭にて私等の手紙も書き字も習ひ本も讀むおと
が出来て利口になるのであります夫れを圓めたり鼻汁を
かむだりしての第一其苦辛した人々にも濟みません第二
に先生の命を守らないから先生にも濟みません又父様や
母様にも申譯のありますまい
○凡太郎土曜日に留めらるゝ話
明日は日曜と御書きなさいと云われしましたから賢太郎様

生徒をして清
書したるを
讀みしを
忘れしを
便法

等々直ぐに石盤に書いたけれども凡太郎様の書けないで
留められました(卓治)夫れ此學校でも先生が極めて御置
きなさる通り御清書を書いて仕舞ふのが皆不揃で早い人も
遅い人もあつて御手本の向ふの御讀みと御講釋の教へを
受くるおとも出来ず其日御清書を書いた所を習て居るより
も是迄御清書を書いて習ひ上げた所を皆様の御清書が書
き終へる迄復習して居て皆が書き終ると先生が書いて御
仰たときに書けないと其字が書ける迄留まつて習て居る
のでありますか(先生)誠に左右であります夫れだから賢太
郎様の早く御清書を書いて仕舞て石盤を出して前の方を一
生懸命で復習して居りました
○凡太郎學校から歸る途中徒の話



五三

無益の徒ら爲す可からず

凡太郎様の學校から歸る途中で犬を噛合せたり蛇を殺したり蛙を殺したり蜻蛉を捕へて其羽を切りたり「バッタ」の足をもぎ取りたり川魚を捕へて弄びたり人の庭前きに眠て居る猫の頭顱を叩いたり草木の花を折つたり無益の事ばかり致します(卓治)凡太郎様も頭顱を扣かれたり足をもがれたりするの厭やであります又殺さるもの尙厭でありますせう自分の厭なことを他のものにするの最も悪いことと思ひます私の母様に我身爪て人の痛さを知れど云ふあとを聞きましました又一昨日も先生に巳れの欲せざる所の人に施す勿れと云ふあとを聞きましましたが誠に左右しなければならぬと思ひます

○油斷坊様遊びに出掛ける話

生徒退校後の心得

師父の叱咤我身なり
子弟の心掛

途中の知己族に逢ふ
心得

凡太郎の禽獸の劣るが
心配

油断坊様の學校より家に歸ると本や算盤や習字作文等の復習をしないで直ぐに遊びに出掛けます(卓治)油断坊様の復習をしないから馬鹿であります私に毎日家に歸ると復習をして其後で明日教へを受くる所の下讀をして参ります開して凡太郎様の父様や母様の何故復習をさせないで遊びに出すのでありませう私の父様や母様の私が遊びに行かうとするど私を利口にしようと思つてたいます叱りま

い人になり親孝行もし父母の名も顯さうと思ひます(先生)油断坊様の賢太郎様や卓治様どの大違ひで家に歸ると直に遊びに出掛け途中で自分の朋友に逢ひても禮も致しません又親類の人や知れた人に逢ても知らぬ顔をして遊びに夢中になつて居ります夫れから又向ふの方へ先生の來るのを見へますと凡太郎様の駈けて横道に派入り隠れて仕舞ひました(卓治)人の萬物の靈長たる所以の禮義を重んじ恩を知るからであります故に若し先生を見掛けられた時喜

遊ぶ時
の心得

已れよ
り年幼
きもの
年多き
人及老
人対心
得する
るに心

をなし又能く夜中の番をなして飼主の恩を忘れませんし
て見ますると凡太郎様の鳩や犬の様であります否鳩や犬
にもかなわんでありませんか

○油断坊様遊び方の話

凡太郎様の遊びに出掛けて何をして遊ぶかと思へば女子
の遊んで居る所へ行って邪険をしたり他の小さき兒をいじめ
夫れから又大工左官の仕事場に行いて遊んで仕事の邪険を
致しました(卓治)私昨日先生に自分より小さき兒の可愛
がり自分より大きな人の敬ひ又半老いたる人への自分よ
り年の多き人少き兒と二人に對する様に取扱ひ親切に
もし敬ひもいなければならず又仕事場等へ行って邪険をす
るものでないといふことを聞きましたが實に左右しな

ければならぬと思ひます先生夫れから凡太郎様の大工に
叱られ逃げて来て獨樂を廻して遊び朋友に怪我を爲せま
した又桃の木にのぼりて枝が折れ乗水ドブに倒にさんぶ
と落ちました幸に怪我はしなかつたけれどもどぶの水を
吞で腹が痛みましたが御醫者様にかゝりて夫れが治ると
又今度は凡太郎様の肌を脱ぎべにがらを腹に付けて其處
へ小刀を中て勘平腹切りだ勘平腹切りだと云つて其真似
を致しましたそんな危い遊びを致しましたから怪我をい
たしましたたとうとうほんどの勘平様の芝居の様腹を切
りましたたが死ぬほどでいありませんでした(卓治)私先生
に危き遊びの爲すべからずと云ふことを聞きましたが凡
太郎様の第一危い遊びをするのが悪う御座います若し獨

悪き遊
をする
見の怪
我も
け

危く
いな
得の
ある
び遊

樂の中り處が悪ければ人の眼にても中ればとんだ難義が
出來ます又若し木から落ちて下に大石でもあり打處が悪
くても死んで仕舞ひます腹も今少し多く切れば死んで仕
舞ひますそんな危い遊をしようより私ならば板を並べ
たりつみ木を積んだり字を上手に書競をしたり算盤の考競
をしたたり繪でも書たり土を挺して工夫して何か拵へて見
たり何でも危くない得のある遊び斗り考へて致します
○凡太郎定期試験を受くる話
月日の經の矢の如しと云ふ營の通り早や定期試験にな
りました故凡太郎様も朝早く學校へ行き先づ讀方の試験
を受けましたたが丁度其所の忘れた所で讀めませんでした
るこで先生が又外の所を出して試験しますとあゝの時間

試験に
なるど
不勉強
もの
の囃子
の様な
○点の
褒美

に後れて致を受けぬ所だどて支へて出來ません又一所の
縁日て休だ所だから矢張り零点是れ佛様の縁日に休む
て學校を欠席した罰だかして早速落第致ししました其他の
子供皆及第して中にも賢太郎様等の書物筆つみ木な
べ板等の御褒美を頂戴して御譽めに預りまして喜んで家に
歸り父様や母様に褒められました夫れを凡太郎様の落
第して免状が貰へなくて泣々目を腫らして家に歸り餘所
の人には笑われ父母に叱られました何と皆様凡太郎様
の可愛さうて有りませんか卓治否可愛さうと云へば言
ふものゝそれ凡太郎様が平生風が吹たり雨や雪が降た
りすれば學校を休み他村の祭禮や縁日でも學校を休み御
天氣の快い日でも寢坊をして後く學校に來たり學校へ來

庫の裡の財に足らぬに

心の玉研げば益々光る

ても油断して居て勉強をしなかつたから若しや教を受けぬ所が出なくとも必ず落第するものと鏡に懸けて見る様であります假令て見ますると手を爪れば痛いし食事をしなれば空腹になるし怠れば試験に落第するの無理なあとて有りませぬ之を六ヶ敷く云へば爾に出たるもの爾に反ると云ふあとてあります(先生)賢太郎様御褒美や免状を貰て何故喜だのであります(卓治)私先生に燕の内の財の朽つるあとあり身の内の財の朽つるあとなしと云ふあとを聞きましたが成程金銀財寶の何程あつても使へば盡ることも有り又久しく置けば朽ちるあともありますけれども學校で覺へた寶の何程使いても盡きない斗りでなく益々良くなりますます朽ちるなど云ふあとに

賢の益々愚の益々

も有りませぬ此賢太郎様等も學校で覺へた眞の寶を腹の中に入れた証據が貰へたから夫れて喜ばしいのであります(先生)賢太郎様何故眞の寶を腹の中へ入れた証據が貰へたので有りませう(卓治)私此間先生に手習の坂に車を押す如く油断をすると後にもどるぞと云ふあとを聞きませうたが尤のあとであります賢太郎様等の油断しないから上へ上つたけれども凡太郎様の油断したから下へ下りませうた夫れ故私等も油断しないで勉強しなければ油断坊様の様になりすから決して油断の致しません

○油断坊様退校させられた話
凡太郎様の五年の間に僅か二度及第した斗りで其外幾度

如何に
長き先
生ても
油断坊
口に閉

蛙の兒
孚化る
一文惜
みの百
文損

教育の
義務を
怠るの
我が身
が如し

試験を受けても落第斗りして居て何時迄も尋常三年級で
ありました其内に年も満十一才になり升た故學校を下
げられまゝた卓治尋常三年級位で退校させられて何の
業に就くにも困るてありませう先生昔の人が一百万錢を
出して女子を嫁せしむることを知て十萬錢を出して子を
教ふるおとを知らずと云ひましたが之を解り易く言ひ換
へますると多くの金をかけて嫁にやることゝ知ても少し
の金をかけて子を教ふることを知らぬと云ふおとであり
ます此凡太郎様の父様や母様も昔の人の云つた通りであ
ります今の世の人其様な考の父様や母様が多くて困り
ます其子が長く學校へ上らなければ如何しても馬鹿な譯
であります馬鹿であれば大きくなつて親不孝はしても親

孝行をすることを知らず金をむだ使ひするおとゝ知ても
澤山儲けるおとを知らず吝嗇にすることゝ知ても儉約と
云ふおとをも知らず目前の少私慾に眼が暗で國の爲
め親の爲めを圖らず齟齬して一生下等社會と呼ばれ貧苦
に其日暮しをする様で親も子も親類も日本の國も皆不
幸でありますせんか其様な親ある一文惜みの百文損と云
ふて子に對しても國に對しても教育の義務を怠りたる譯
で濟まぬおとゝ考がへます卓治私早く大きくなつて世
の中の愚かな人を皆教育して利口に仕立てるして安樂自由
の空氣を呼吸するおとの出来る様にしてやりたくありま
す

○油断坊様着の番をする話



太平の
浴澤

皆様が今日安樂に其日を送り飽まで食ひ暖に衣て日々學
 校に通ふて賢き人となられるの誰が爲めでありますか
 (卓治)是の先生や父母の御蔭であります先生なるほどさう
 じやがまだ其れて十分な御答でありません其父
 母が皆様に不自由をさせず庫の裡の財寶よりいと大切な
 財寶即ち學問を皆様の身の中に十分に仕込むとの出來
 るのの上に賢く明かな天子様が在して我々人民の幸福を
 圖らせ賜ふの勿論下に國の爲め民の爲め東に西に南に北
 に駆け走りて財産を抛ち妻子と共に其の身を國家の犠牲
 に供ふる志士仁人ありしに由る明日の其の鼻祖ども云ふ
 べき宗吾神社佐倉大明神の御祭日なれば親類近所の客を
 招き祝ひの筵會を開かんとて大なき金鎗魚を二本と鯛や

魚の番に油断する大敵
猫の油断する大敵
飯釜の火を焚く
火を焚く油断する大敵
断を油断する大敵
断を油断する大敵
断を油断する大敵
断を油断する大敵

平日を澤山買ひて簀の上に乗せ今に料理するから其迄少しの間此魚の番をおしよとて凡太郎様に言付けました凡太郎様の母様の言付けだからはいと云ふことを聞いて番をして居りましたたが側にある石を取て大ほきな石をどんか
くくと叩いて遊で居りました其内凡太郎様の母様が料理しに來て見ると其魚の班猫や虎猫や三毛猫などが五六匹來て荒増食べて仕舞ひました故明日の御祭の肴にさし支へました
○凡太郎飯釜の火を焚く話
或る時母様が裁縫をするので忙敷から御飯を炊く支度して凡太郎様に其釜の下を燃させました夫れから母様が凡太郎最う御せん出来たかと聞ても聞ても返事がありません

せん其筈よ凡太郎様のさき程より居睡りをして居て飯の出来損じて仕舞て御晝飯を直ぐに食べることに出来ませんでした(卓治)彼の事と云ひ此事と云ひ油断坊様の名に能く中つて居りますよ(松本先生)夫れから御飯を別に炊いて食べますときに凡太郎様の澤山食べて腹が痛い腹が痛い
と云つて居りましたたが此事に付き面白き話がありませ昔大將軍足利氏の庵人が百才以上になりましても壯健です故他の人が長生の法を問ひますると其庵人の答ますに別には是れぞと云ふ秘傳もないが我れ此年まで永き年月を庵人で過おしたたが何時料理する時でも雁島の胃袋に食物が一抔満ちて居るけれども鶴の胃袋に満ちて居ません
るあで私に雁島の天するのの大食するからだらう鶴の壽

きの大食しないからだらうと思ひました故決して大食ひ
を致しませんそれがそれで壽すると考へられますと云ひまし
た(卓治)それで凡太郎様の大食した故早く死ぬであります
せう私の鶴の様に千年も生きたい故大食ひの決して致し
ません

○油断坊様使ひをする話

凡太郎様の母様に二里斗りある所へ使を云ひ付けられま
した凡太郎様の年十三才であり乍ら母様私の道を知
らないから厭だといひましたが母様に叱られてやつと使
ひに出掛けました(卓治)二里あつても三里あつても幾何遠
くとも道を知らなくとも人に聞けば譯ります昔の人の詞
にも道の鼻の下にありと云ふことがあり又昔から

道を知
らない
と云ふ
と使を
逃れん
と息を
もどる
本色

道の鼻
の下に
あり

言及の
心得よ
使先り
たり歸
の心時
得

盲人の京上り申して盲人でさへも奥州のはてから京都
まで三百里も四百里もある道を行き歸りしたさうですが
今の世の中で盲人の世界巡りも左様六ヶ敷くのありま
すまい諺に渡る世間に鬼はないといふほんに此の事であり
ませう(先生)凡太郎様の強ひられて漸く使にのまゐりまし
たが使ひ先であまり早言語で解らないで困りました夫れ
から家に歸りて其使のあとを何ども申しませんでした卓
治(總て)談話に静かに丁寧に云ひなければなりません又
家に歸つたら其使のあとを直ぐに云ひなければなりません
まい

○凡太郎喧嘩をする話

或る時凡太郎様の途を歩きます時五才斗りなる小兒

無加人加無
禮あふるを
もあるるを
もあるるを
かむ川く

が彼れ油断坊様だよと云ひますると其小兒の兄様が傍
に居て凡太郎様此兒が其様な事を云つたの失禮で有
りますすが小兒の事だから何卒堪忍して下さいと詫
ひました而るに凡太郎様の勘忍が出来ぬと云ひ乍ら小兒に
打て掛らんとするを小兒の兄様が止めますと凡太郎様の
又其兄様にも打つてかゝりし故遂に大喧嘩になり凡太郎
様は二人にひどい目に逢せられました(卓治)幼い兄の善
事も悪しき事も知らず只何心なく饒舌ものです故私等が
夢で夢中で饒舌か又の癡癡白痴及老耄者が饒舌と同様何
意志なく饒舌も故假令何を云ふとも少しも取合はない
が宜しう御座いますせう之れを云ひ換へますれば死人や鳥
獸を相手にして喧嘩するのと同じ道理で有りませんか

死人鳥
獸石佛
木像を
相手に
喧嘩を
するど
同様
相撲と
争闘の
一人
出来ず

柳の枝
に雪折
れなし

路傍の石佛や木像を相手に喧嘩をするのと同じ道理で有
りませんか況して小兒の兄様が其道理を云つて詫びた
で有りますせんか夫れを勘忍が出来ぬ杯と云ふの道理の
解らぬ凡太郎様で御座います私か考へまするのに相撲や
喧嘩の一人て出来るもので有りません夫れ故若し他人
より争ひを仕掛けらるゝとき取り合はぬが宜しう御座
います避けて仕舞へば一人て争闘が出来ません夫れを避
けずに禽獸同様の馬鹿を相手にすれば其馬鹿であります
(先生)若しあなたに争闘を仕掛けるものあれば如何致しま
すか(卓治)合手にしません(先生)其れを合手にせぬ何故で
ありますか(卓治)一体争闘と云ふ事の道理の善悪に拘はら
ず只腕力で斗り勝負を決定する事故彼の犬や猫や雞と少し

くむな
警察署
よに訴
所や裁
よに訴

も違ふ所ありません人間たるもの互ひに道理の曲直
を静かに解けるが宜しく有ります若し相對にて解らざれ
ば朋友に解けて貰ふか又先生に訴へて解けて貰ふが乃ち
萬物の靈たる人間で御座いませう(先生)誠に尤の事であり
ます皆様が追々成長して學校を下がり世の中に立つ様に
なつた時必ず争闘を成さります若し暴を加へる人が
あれば警察署に訴へて巡査様に引渡すが宜しくあります
又餘り好ましき事での有りませんが若しも自分の損得に
關する事にて道理の解らぬ人が有れば裁判所に訴へて裁
判官に裁判を乞ふが宜しう御座います併し古への語に私
戦に怯く公戦に勇むと云ふことがあります故三十六計逃ぐる
した喧嘩の様なことゝ私戦でありませ故三十六計逃ぐる

が上策で有ります諺に負けるが勝ちどゝ眞に此事であり
ます然れども國の爲めに外國と戦争をする様な事の公戦
でありますから勇みに勇み敵を斃して天晴功名手柄をせ
ねばなりませんぞ
夫れから又兄弟仲も睦くせねばなりません卓治様よ此一
本の細竹を折つて御覽なさい折れましたね夫れで今度
此五本の細竹を一度に折つて御覽なさい如何しても折
れませんか今皆様の御覽の通り此細竹も一本宛離せば折
れますか五本を一とまどめにすれば折れません人も其通
り兄弟一人に離れになれば弱くて人にも折られま
すが兄弟睦よくして居れば強くありますから人にひどい
目にあはせらるゝ様なことのないのゝ此睦き二人の子供

を見ても解るでいありませんか

○油断坊様水に溺るゝ話

或る時凡太郎様が船に乗りて或る川の渡し場を渡らんと
せしに船頭が誤て船と船とを突き合はする途端に皆よろ
よろよろけします内にて獨凡太郎様斗り川の中にさんぶ
と落ちました所が凡太郎様泳ぎを知らぬもの故一生懸命
で救けて呉れ救すけて呉れと泣き叫び浮きつ沈みつ水
のまにまに流がれもし今にも死んで仕舞ふかと思ふ内漸
々船頭が上げて呉れましたが凡太郎様の水を澤山香て蒼
くなり生きた相有りませんでしたけれども其村の人に
自分の家迄送られ御醫者様に掛りて九死に一生を得まし
た(卓治)他の人の川に落ちぬのに只獨り凡太郎様斗り落ち

水練の
必用

るどい定めて船の端にでもボカンとして居たので有りま
せう船頭も油断坊様なら凡太郎様も油断坊様で有ります
ね、若しも其時船頭が救ひ上げて呉れなければ此上も無
い大事な金で買われぬ命を捨てたので有りませう身体髪
膚を父母に受け毀傷せぬが孝の始めと云ふとが孝經と云
ふ本にあると承りましたが凡太郎様の様に父母の遺体を
大事にせねば何より親不孝でいありませんか若し凡太郎
様が游泳が出来たら假令海川に落つる共大威張で泳ぎ
上がられたので有りませう臆水練も肝腎必要の者であり
ますな學問と全じく覺へなければなりませんね、併し無
闇に游泳を習ふとして溺死してはいけませんよ

○油断坊様臆病の話

臆病も
心
の
から
け
ら
る
化
け
物
が
出
る

凡太郎様の山に行き木の根を見て蛇と思ひ一生懸命で
 飛越て駈ければ後から誰れか追駈けて來るから益々急い
 て逃げて來れば益々急いで追駈けて來ると思ひの外能く
 考へて見ますると自分の足音でありました夫れから又夜
 になる狸がでるの狐に馬鹿されるのが怖いのとて一人
 で小便にも行き得ません夫れから又何處の山に天狗が
 居るとか何處の川にいつばが居るとか見ると聞くと
 のをこのがつて斗り居りました(卓治)あの世間で狐付きな
 ど云ふとは油断坊様の様な「あ」がり坊様が自分の心
 が狂つて狐に付かれたと思ふのでありますどうして狐の
 畜生などが萬物の靈たる人間を馬鹿にする道理のありま
 すものか其証據に恐れな利口な人が狐に付かれたと



物理に
明かな
るかに
奇人に
思議な

か馬鹿にされたとか云ふ話のありませぬ(先生)爾うじや凡て世の中の物に皆道理のあることで決して奇妙や不思議と云ふことはい有りませぬぞ夫れだから水の中で焼死ぬとか火の中で凍死ぬとか寝て居て怪我をするとか云ふおどがあれは其れおろ誠に奇妙不思議でありますが其他決して此の世の中に奇妙不思議と云ふことはい有りませぬ馬鹿な者の眼の中に不思議と見ゆるものも賢き人の書物を讀み坏して物の理を悟て居るから不思議と云ふことがありませぬ夫れ故に鹿馬なものほど不思議な事が澤山あります夫れ故昔の彼の狐憑や「カツパ」憑其他種々の化物がおりましたのが今でいり學が開けて其様な化物の皆諸子御存じの幻映器の如きものだと云ふとが分かつたでい有りませぬ

臆病も
の能
くうそ
を云ふ

虚言す
べから
ず

せんか

○凡太郎虚言を云ふ話

うそを云ふの臆病ものにありと昔の人の云ひ置た通り凡太郎様の遊びに出掛けて狼が来たから救けて呉れ救けて呉れと呼びました故近所の人の皆手に刀や木刀を持って急いで駆け付けました所が眞に狼の来たていなく凡太郎様が虚言を云ふたのでありました其後又凡太郎様が狼が来たから救けて呉れ救けて呉れと一生懸命に呼だけれども近所の人の何時も虚言を云ふ凡太郎様だから又虚言を云ふのだらうと思ひて援けに来る人の有りませぬ故凡太郎様の狼に足を噛まれ目を抓かれ疵だらけ血だらけになつてもう少しで噛殺されさうでありました幸ひ旅人が

通りかゝりやつこのことで援かりましたければ夫れが
 爲めびつあにめつかちになりました(卓治)夫れでの甲斐の
 信玄の家來山本勘助の様であります若しも旅人が來なけ
 れば狼の餌になつたであります眞に危いとでありますし
 た夫れと云ふも其の源因を尋ねますれば虚言つきから
 ありますね(先生)ろの様ならそつきの凡太郎様だから誰
 も相手になくなりしました廣い世間も狭くなり日本に三
 千九百万の同胞あるも只自分一人切りの様な有様であり
 ました其都合不愉快の如何斗りてありましたら虚言
 も自分のからだに怪我をして不具者になりまた人が交際
 せぬ位の事なまだまだ聊かの事で虚言する人の終に人の
 物を盗む様な悪い人になります虚言つき盗人の始まり

うろつ
 き坊廣
 い世間
 を狭く
 する

虚言の
 盗人の
 始まり

と昔の人の戒めました皆様忘れても虚言をお云ひなさる

○凡太郎約束を違へる話

或る時凡太郎様のあしたの演説亭に演説があるから一緒
 に聞きに参りませうと云つて約束して置いて参りません
 又明日の私が待つて居りますから御出でなさいなどと云
 つて不在したあともありて度々約束を違へます(卓治)約束
 を違へるの矢張り虚言をつくのど全じことであります
 又人に時間を損させるの時間金だから金を損させる
 と同じことで至極悪いあどであります夫れだのに凡太郎
 様斗りで有りません世間の人が約束の時間を違へるの
 の左程悪いあどと思つて居らぬ人が多くありますが誠に

時金の
 なり

虚言す
 る人の
 約束を
 守らず



三十三

横着者
を飾る
を飾る者
を飾る者

困つた譯でありますね。○油断坊様土瓶を毀した話
油断坊様茶碗に御湯をつがうとして土瓶の蔓が外れて土
瓶を毀して湯が足にかゝりました。温湯でありましたか
ら幸に怪我を致しませんでした。けれども其土瓶のあはし
たのを密と壓着けて置き知らぬ振りをして居りました。過
つて改めざる之を過ちと云ふと、此事でありました。昔し
面洋の「あめりか」と云ふ國に「わしんどん」と云ふ人がありま
した。此人小供のとき父様の切大にして置く植木の花を父
に貰ひし小刀で遂過ちてと切りました。故父様の夫れども
知らず怒りて「わしんどん」を呼びて切つた人を問ひ糺しま
すと其とき「わしんどん」思ふに「我の今之を知らぬと云へ

正直の
立身の
基なり

ば叱られる氣遣ひのなし左れども虚言を云ふて父を欺く
此上もなき悪しきことと思ひて正直に其花の私が切り
ました何卒御免なさつて下さいと猶豫なく訴へました過
ちて改むるに憚るゑと勿れど古への人の善き教へで
あります父様の先に大層怒られたけれども「わしんどん」
の正直な心を悦びて其罪を許したさうですかゝた正直な
善い兒故「わしんどん」の後大人となりてから「あめりか」の國
の人が「いざりす」と云ふ國に壓制せらるゝを見兼て「いきり
す」の國と戦争をして其戦争に打勝つて大統領と云ふ王様
の様な貴い御身分に上がりました(卓治)凡太郎様は虚言つ
き故人が相手にしなくなり「わしんどん」の正直故大統領に
撰まれたました故私も「わしんどん」の様に出世してゑらい人

正木
の金
に花を
開き
の實
を結ぶ

になりたい故決して虚言はつきません虚言をつくの泥
棒の始まりだと云ふゑとは先き程も承りましたが今の御
話で益々合点いたしました正木に金と譽れがなりま
すね！

父母に
心を配
苦を掛
くる者
親不孝

○凡太郎の父母の死亡つた話
凡太郎様の父様の病氣で亡くなる間もなく母様も亦病
死致しました其父母様も凡太郎様が馬鹿だ故後の事ま
で始終心配苦勞をして亡くなられました何と凡太郎様の
親不孝者で有りませんか(卓治)私の先生に過ちの改むる
に憚かる勿れと云ふゑと過ちて改めざる之を過ちと云
ふと云ふゑとを修身時間に聞いたゑとが有ります凡太
郎様も過ちの改むるに憚かることなく過ちたれば其過ち

孝行を
しつたい
時分に
親のな

馬鹿者
の持て
恩を知
る親の

を改めさへすれば善き人となられて父様と母様に心配苦
勞をさせないで宜かつたらうよ今となつての最う致方が
ありませぬ昔の人が木静まらんと欲すれば風止まず子養
のんど欲すれば親在さずと云つたのの諺に親孝行をした
い時分に親はなしと云ふのと同じ譯で何れも兩親の在る
うち孝行して後悔せぬ様にどの誠まことに善よい教へであります
夫れだから私等も能く勉強して善き人となり親の在ます
内孝行をしなければなりません小學讀本にも父母の恩の
山よりも高く海よりも深くと云ふことが有ります其恩
を報さないので人の品物を借りて返さないより甚しう御
座います彼の鳥の様な小鳥でさへも反哺の孝と云ひて其
親鳥に食物を哺み反して孝行をするのでありますせんか

昔し下毛野公助の嘗て右近馬場に賭射して負け父の武則
に撻うたれ伏して之れを受けました或る人が何故逃げざり
しやと問ひますると公助の父の年老いて足弱し若し我を
追ふて躓つき損傷せば我罪を重ぬると故逃げなかつたと答
へました又伯愈と云ふ人の我る時過あやまちありて母に答たれ
泣きける故其の母の云ふやう汝他日答たれても泣かなく
て今日に限り泣くの何故ぞと問ひますると伯愈の對へて
私わたしのゑれまで罪を得て答たれば常に痛くありましたが
今日けふの痛くありませぬ故母様がお年をお取りなされお力
もお衰へなされたかと思ひて悲哀に堪へ兼ね泣きました
と申しました
又老萊子と云ふ人の七十の年寄りであり乍ら赤子の着る

様な五色の斑爛な着物を着て水を持ち堂に上る時わざと
 跌き仆れて小兒の啼き聲で泣き且雛人形を親の側で弄び
 て何でも親の喜ぶ様に喜ぶ様に致しました
 又杵築郡の中西伊兵衛と云ふ人の歌を歌ひ舞を舞ふて父
 を喜ばしめて夜に及ぶとあるも其の身の疲るゝを知らな
 かつたさうて有りませす
 又晋の王哀の父王儀の墓側に廬して毎に旦夕墓所に
 至り跪き拜みて柏に攀ちて悲み號き其の涙樹に注ぎ夫れ
 が爲めに枯れました
 又安藝の國に孝子がありまして或る時外に出でやうとす
 る時に母の雨後道路注濇故木履を穿き行けと云ひ付け父
 の天既に晴る草履にて可と云ひ付け木履を穿けば父に叱

られ之を脱き草履を穿けば母に叱られ脱いたり穿いたり
 父母の命のまゝにすると四五度遂に隻足に木履隻足に草
 履を穿いて行きまゝした
 又筑前の正輔の風痺の父の痛き所の撫り痒き所の搔き手
 を引き肩に寄せ外へ出る時脊負ひ其の外父の嗜む物
 の何でも供へ且つ敬禮を盡くしました藩侯も大いに感心
 せられて田一町五反を賜はり末永く田租と徭役を免され
 加之米若干斛を賜はりました其の後正輔病死しければ命
 じて碑を建てさせ孝子正輔の墓と題しました侯若し此の
 墓邊を過ぐる時必ず輿車より下りて禮拜せられました
 嗚呼孝の百行の基萬善の本との實に尤の事での有りませ
 んか此の外世間に孝子の話の澤山ありますが一お話

大油盜賊の敵

して了りませう
 昔し航海船上より乗客一人過ちて大海に落ちました船頭
 の之れを救はうとして直様飛び込みますとあら危なや一
 尾の大きな鰐魚が現はれ出で忽ち此の二人を一と呑みに
 しさうな有様の處折りしも此の船頭の幼兒の之れを見る
 や否早くも小刀を持ち飛び込み大膽にも鰐魚を刺し殺さ
 うとする故あら憐むべし鰐魚の怒つて顧て此の幼兒を丸
 呑みに致しました其の間に乗客と父親の辛ふじて船に這
 ひ上りて助かりました噫
 ○油断坊様盗人に這入らるゝ話
 凡太郎様の油断坊でもある一夫れに父母も亡くなつたの
 をつけ込で泥棒が五人斗り來て戸締まりのして無かつた

油断の付火の敵

のを幸ひに窃に派入つて御金や着物などをどつさり荷車に載
 せて皆持つて行きました夫れを油断坊様の少しも知らな
 いて平氣でぐうぐう寝て居て朝になつて驚きましたたけれ
 ども何とも致方がありませんで只茫然として居りました
 (卓治)あの油断坊様夫れだから戸締まりをするのを忘れた
 でありませう若し嚴重に戸締まりがしてあれば泥棒も容
 易に派入るゝと出来すまいのにま一何ても油断のな
 らぬ今の世の中
 ○油断坊様火元をする話
 凡太郎様の或る夜寝て居て急に熱くなつたので目が覺め
 ますと四方八方家中が火になつて居て恰も狭穂彦が火攻
 めになつた時の様でありました凡太郎様の馬鹿でも命

火の要

が惜いと見へ一生懸命でねまきのまゝ逃出し漸々の事で
焼死にの致しませんでした其夜の折悪しく風強く終に
大火事になつて近所の家迄焼けました夫れと云ふも其元
を尋ねて見ますれば凡太郎様が油断してこたつの中へ浦
團の端が派入つて居ましたのに氣がつかないで寝入つた
故こたつから蒲團々々から障子に燃へ付いたのださうで
あります(卓治)ほんに危い事です夫れ故私の母様のいお寝な
さる時には必ず火鉢やいろりやあたたつやかまどの火を能
く消し火消壺の蓋もして有るか無いかと能く見て御寝成
さいます私が考へまするのに「ランプ」も點けたまゝ寝ると
油も損であるし炭酸氣も多くなつて不養生故寝るときに
い直ぐに點けられる様に「まつち」を傍に置いて消して寝る

が宜う御座いませう總て火の要鎮に要眞をせねばなりま
せん煙草の火も火事の基となりますから(先生)序でに御話
しをして置ませうが石油の不經濟や炭酸氣の不衛生位
いのまたの事今より五六年前私の故郷近き東海道の勝地
小陶綾磯近在の或る富商の丁稚小僧が夕方石油を賣ら
として手洋燈を遂過ちて石油箱の上に覆へし瞬く間に燃
へ上がらあいや云ふ暇もなく傍の石油箱にも燃へ移り
忽ち大火事となり家倉迄焼き拂ひ其の身も逃げ出す隙な
く諸共果敢なく最期を遂ぬ其の他數人の怪我人もあり
し嗚呼皆様よ其の小僧様の父様や母様や兄弟親類の悲し
み嘆きの如何斗りでありませう又其の主人の落膽の何程
で有りませうか元來石油と云ふ者の火に觸るれば直ぐに

火元を
すれば
此の如
し學校
の先生

燃へ上がるものです故石油を取扱ふ人の餘程能く注意せ
ねばなりません豈恐ろしい話して有りませんか皆様よ
若し洋燈が覆へりて其油が席上に燃へ上がれば諸子の如
何成さりますか(卓治)直ぐに水を注たら熄へませう(先生)他
の火の皆水で熄へますが石油の火斗りの熄へる所か却つ
て火の勢ひが熾んになります故に之を消すに若物て
も「ケツト」でも板でも何でも有り合つた物を急いで覆ひさ
へすれば直ぐに消へます(卓治)して見ると世上で往々洋燈
から火事が出る杯と云ふの洋燈の罪でなく其の取扱方
の悪い故だと云ふと能く解かりました若しも其の小僧
様が學校に上がりて先生に石油の取扱方を教へられて居
たならば大切の身体も失はず主人の貴とき財産も空しく

石油の
取扱方
の取果
方を教
ふてか

焼失せる様なと無かつたかも知れません噫私は千金の
玉より最と貴ときの話しを承はりました
○凡太郎乞食となる話
今御話ししました通り凡太郎様の火事の火元をしてねまき
を着たまゝ駄け出しました切り他の物の何も蚊も皆焼け
て仕舞ひ今どなつての別に着る物も食べ物も道具も何も
ありません故ほんのねまき一つになりました其上近所の
人も彼奴が火元をして已れたちの家を焼いたのだ貨財も
焼たのだうつかり坊が悪いからだ皆怒つて居て着る物
や食べるものを呉れる所が中に凡太郎をひどいめに合
せろとか何とか蚊とか暴を云ふものも有りて凡太郎様も
其處に居る事が出来なくなり生れ古郷を立ち去ることゝ

火元の
すれ元
を此の
如し

八十九



凡太郎
の何故
乞食を
する

なりました尋常三年級位で學校を下がつて仕舞つたか
ら讀書算盤も能く知らないし怠惰癖と「うっかり坊」の癖
がついて居るから仕事も出来ず頼む人もなく去り迎食の
ず居れば死んで仕舞ふから致方泣く泣く人の家の門口
に立ち何卒難澁な乞食に一文頂かして下さいとか何ぞ食
べるものを頂戴致したら存じますとか又咽が乾いて困り
ますから御湯でも御茶でも一杯救けて下さい杯と哀れな
聲にて家々に願ひ入れても出ませんとか手が塞がりて居
るどか當時の乞食の御廢した稼で食べよ杯と取り合ふ人
もなく今の早や凡太郎様のまづい食物も食べる事の出来
ないの申す迄もなく湯も自由に飲むことゝの協はずして
目の回み身体の瘡せ顔色の青黒くなり頭髪の梳らず着物

乞食は
國家の
害虫

乞食は
を喰ふ

の切れて襦袢となり虱のたかれども着換へなく切れた
 るねまき一枚で足袋もない故寒いのと冷たいのに堪まり
 かね風を引けども世話をする人もなく其の上へ乞食其處
 に居てはいけなす他處へ行けど小言を云われ人の家の軒
 の下にも寝る事が出来ず山に寝たり野に寝たりすれば蟻
 や百足などに刺されるやら犬に吠へらるゝやらほんに泣
 面に蜂が刺すと諺に云へるが如き有様にて碌々寝入るこ
 とも出来ず巡査様に國元へ歸れど叱かられ彼處へ行い
 ても此處へ来てても飯の食はずに食べるもの小言とけん
 つく斗り澤山で其れ幾何食べても飢た足しにならず
 仕舞ひに腹が空てひと足も歩行けぬ迄になり實にもう
 目もあてられぬ憐れな有様でありました



乞食

此の世の地獄の種

○凡太郎後悔して死ぬ話
其時凡太郎様心中で思ふに我れ何不足なき富家に生まれ乍ら今此様な憂き目を見るも賢太郎様の貧乏な家に生まれて今東京へ行き小學校の教員をし乍ら法律學とやらを學で居るのも皆是れ先生が云れた通り苦あれは樂あり樂あれば苦あると云ふ事に違はず我れ幼き時怠けて油斷したりして樂であつたから今此様な苦があるけれど賢太郎様の幼い時から能く苦むで勉強したから爾後樂があるに相違ない又先生が地獄や極樂の地の下にあるものでなく此世の地獄かと思へば先生にも父母にも實に申譯のないまどである先生や父母の教へる有難いものであ

後悔前
たき
に立

る噫勿体ないといひつゝ身慄ひし乍ら何卒先生よ父母よ私の罪を許して下さいと悲しき極まり涙に咽ひ蚊の鳴く如く糸より細き聲を揚げ哀れな聲を限り呼べと叫べど返事するものなく終に飢ゑ疲れ路傍に倒れて死にました(卓治)私に過日先生に鳥の將に死せんとする其泣くや哀し人の將に死せんとする其言や善しと云ふことを聞きまし人が成程泥棒でも油斷坊でも凡太郎様でも死ぬ時に善き人になりますね併し凡太郎様が今覺つて善き人になつたとして六日の菖蒲や十日の菊遅かつた由良之助後の祭りりて臍を騒むとも及ぶなく後悔の前きに立たぬの譬の通り今となりて如何する事も出来ませぬ轉輾ばぬ前きの杖を用心するが用心であります爾に出でたるもの爾に

輾
ばぬ
前
の
杖



馬鹿に
つける
薬の凡
太郎丸
ばかり

反る自業自得といふに可憐な凡太郎様も
 々々惚れむべき話で御座いませんか此間先生に人の善を
 見てこれに倣ひ悪を見て我が身を省み正せと教へら
 れました通り凡太郎様の話も我が身の馬鹿を治す薬と致
 しませう誠に面白い爲めになる御話を承はりまして此上
 もなく嬉しう存じます夫れから賢太郎様の如何致しまし
 たね(松本先生)凡太郎様の話の是れで終りましたが夫れ
 での明日の脩身時間には賢太郎様の話を一寸致しませう
 ○是輪賢太郎の話
 抑も此賢太郎様の貧しき家に生まれて暮らしたに困るから
 十四才の春學校の高等一年で下げられて其年の夏から吳
 服屋へ奉公に行きましたけれども性質賢い子供なれば厭

一心恐るべし

な事も厭ども云はずつらき事も忍耐して何事もはいはい
と仕事に勉強する故主人に氣に入られて勤めて居り乍ら
仕事に暇にも休まずに讀み書き算盤を學び又夜間になつ
ても寝る間も寝ずに一生懸命で勉強致しました故一心と
云ふものは恐ろしいもので賢太郎様は間暇を見り見り少
し宛學んだのだけれども塵も積もれば山となり車も聚れ
ば海川となる譬の通り日を重ね月を重ね年を重ねるに従
つて随分學問が出来来る様になり丁稚子僧から一足飛びに
小學校教師になりましてたけれど賢太郎様だけあつて小
成に安んぜず毎日生徒を教へ家に歸れば公務の暇には常
に法律學校に通ふて一心不乱に勉強し遂に判事登用試験
に及第して今度は裁判官になりましてたが賢太郎様は尙ほ

勉強の効

王侯將相何ぞ
種あらん

進んで取るの氣象に富み昔我國の大閥秀吉と云ふ人の草
履取りから進んで關白となり天下の政權を握り朝鮮征代
などして名を海外に迄も輝かし又佛蘭西と云ふ國の帝位
に上り世界に其名を知られたる「ナポレオン」と云ふ人も其
初めのあるしか嶋の土百姓であつたと云ふあどだ又昔し
ふらんすの國の天子様が英吉利の國に攻められてあるれ
あんど云ふ城に圍まれ今にも國を取られんとする時じや
んだしくと云ふ人の女であり乍ら土百姓から起つて義兵
を擧げあるれあん城の圍みを解き英國の兵隊を退ぞけ九
十年の戦争も之れが爲め目出度止むだど云ふあどだが成
程昔の人が王侯將相何ぞ種あらんと云へるが如く王様に
なるにも大名になるにも大將になるにも宰相になるにも



身玉

宇宙第一の兎もあれ
仁者に敵なし

決して別に其の種の有るものでなく只其人の心一つはた
 らき一つに因るものにて其他男でも女でもえらい人の幾
 何も貧乏で賤しきものから出ました貧賤英雄を作るとか
 艱難汝を玉にすなどい能く云つた噫我も裁判官の愚か
 日本第一の勿論世界第一の英雄と稱へらるる人となり父
 母の名を顯した上に世の中の無理な事をする奴を厭倒
 し難儀な人を扶けたいものだと云ふ目的で間暇がありさ
 へすれば一心に勉強致しました故其時の人賢太郎様と
 云いずには壓扶様と云ひました昔の國と國どが外見は文明
 開化の國と唱へて互ひに睦く交際して居る様が内幕の仲
 々左右でなく恰も禽獸社會の如く弱者の肉は強者の食物
 少し斗りの事から戦争を始め涙の川や血の海や死骸の山

勉強の
結果の
なる神

が出来る程にて我々の先祖は蜻蛉の様な國に生まれ
た夜も安々と寝る事も出来ず丁度凡太郎様が乞食になつ
た時の様で有つたと云ふ事だが今の世の中が此様に善く
治まり難儀をしたり無理な事をされたりする事もなく世
界中の人々が皆妻子と共に安樂に此世を送る事が出来る
様になつたのも皆此壓扶様の御蔭であります夫れだから
此村にも有る様な壓扶神社が何處の國何處の村へ行きて
も有りますすが是輪賢太郎様を祀つたのであります夫れだ
から神様に御參詣するの其人が我々の爲めに働かれし
功德を慕ひ恩を忘れず恩を謝するのであります斯うすれ
ばこそ萬物の靈と云ふ肩書のつくので有ります而るに世
の中の愚な人の南無神様何卒私の金持ちになる様に利口

一人の
心だ

になる様に出世が出来る様になど、拜むの天間違ひであ
ります昔し西洋の或る國の「カセゲ」と云ふ赤髭の工人があ
りました此人も馬鹿の一人と見へ富になる様に毎日四
時間宛一心に神様を拜みましたけれども矢張り以前の如
く富にならぬ故大へん怒つて神像を川に投げ込み拜む間
を一生懸命で働きましたら大金持ちになつたと云ふ話が
あります天の勉むる人に幸ひを與へるとは此事で有りま
せう(日本卓治)噫、勉強の幸福を生む母とか事は勉強に在り
とか精神一到何事か成らざらんとか熱心金を銷かすとか
一心岩をも徹すとか云ふ事があります成程左右であり
ます賢太郎様も一心に勉強した故世界第一の人になり神
様に祀られたのであります夫れだから私も貧乏な家に生

學問するに資する金を入らず

勇氣を振へ

まれて學問する資本などい決して出して貰う事は出来
せんがねらい人になるには金は入りません入るのは只勉
強と忍耐であります(松本先生)誠に左右でありますが其勉
強と忍耐と云ふ事は柔弱卑怯の人には出来ません學問を
勉強するも事業に忍耐なるも國の爲め死を畏れざるも身
を捨てて親に孝行をしたり人を救ふたりするも皆勇氣が
無ければ出来ません勇氣とは勇ましい氣象と云ふて日本
では昔から此勇氣の事を日本魂と云ひました(日本卓治)夫
れでは事業に忍耐なるにゆゑとん氏や國の爲めに死せる
楠正成公や人民を助けやうとして命を捨てたる佐倉宗五
郎様などは皆勇氣のある人でありませう私も日本人であ
りますから日本魂を持つて生れて來ました何卒勉強して



世界一
キリモ
リッ
手一
て段
何し
如果

新教育
生徒演説終

早く大人になりて此地球を手玉に取つたり圓い世界を四角にしたたりして見たう御座います(松本先生)是迄私しが御話した事は如何様な事だか極短かく詰めて一口に答へて御覽なさい(日本卓治)凡太郎の様に油断して此世の地獄で困むだけけれども賢太郎様は油断しないで勉強して此世の極樂で樂むのだと云ふ事でせう(松本先生)尙短かく一口に答へて御覽なさい(日本卓治)油断は大敵だと云ふ事でせう噫油断大敵噫噫眞に油断大敵油断ほど恐ろしい大敵はありませんね
因に記す讀者よ此日本卓治なるものは後來必竟如何様人になるか不日書生夫婦論の出づるを待ちて知り玉へ

實に光陰に關守りなく放ちし矢よりも尙速し私が休息致しましたの是最早二時間も経ちました大分お手が鳴ります故皆様が凡太郎は如何な人間でありますか如何な行爲を諸皆様よ凡太郎は如何な人間でありますか如何な行爲を致しまして如何な最期を遂げましたか篤とお解かりで御座います凡太郎の行爲と最期を見て一口に言ひますれば馬鹿の三太郎と云ふより外は御座りませぬ其様な大馬鹿野郎の凡太郎を世界第一古往今來無比の豪傑なと云ふは貴様も随分馬鹿の大將油断坊と一對の天保錢めとお叱りも御座いますせうが左右云ふ方ある却つて凡太郎様で御座います何せなれば昔し寛永の頃永井信濃守尙政と云ふ人が徳川幕府の元老井伊掃部頭直孝に一言にて終

身の心得となるべき金言をお授け下さいと願ひますと
掃部頭が斯かる大事は今勿卒に教へるとは相成らず後日
某が宅へ沐浴齋戒袴上下を着付け来るべしと仰せられ
ば信濃守は畏まりて仰の如く禮服を着け推参りけるに掃
部頭は其の要道は他事に非らず世話に所謂油斷大敵と云
ふとだど仰せられました又昔し周の武王と申す聖天子様
が即位の始め大公望と云ふ人に亦簡約にして生涯心得て
百世の模範ともなるべき要道を問はれしに大公望は丹書
と云ふ本にありとて此れと同じ意義のとを答へられたと
云ふとは諸君も定めて御承知のとて御座いませう
然らば油斷大敵と云ふとは古今内外上王侯貴人より下庶
人に至るまで何人にも生涯の心得となるべき要道である

と云ふとはお分かりで御座いませう
去は去り乍ら此の豪傑
大馬鹿馬鹿の果てなしで
油斷坊には相違なし
豪傑と云ふ其の理由は
受くるは物の數ともせず
殺して以て満天下の
未來永々後代の
勝つても兜の緒を締めさせ
大閥「シーザー」「ナポレオン」
清盛足利「タメルラン」
一と世に鳴りし豪傑は

姓は鱈津に名は凡太
あまけに泣き面、蜂が刺す
けれ共兎に角「ポニック」奴が
罵詈譏や嘲笑を
油斷の爲めに其の身をば
王侯相將匹夫野人
猫も杓子も賢者には
愚者には着ける薬となる
「アレキサンデル」、始皇帝
何様な稀代の英雄でも
煩惱心に、羈されて

名譽の爲めに世を騒がし
民を苦しめ人を殺し
如何で及ばん、鱈津氏に
ぶら提灯と鐘の
此の子を産みし、其の親の
必ず共に名譽をも
然らば慈母は大幸福
智仁勇の三つの者
凡太は無類の大豪傑
目出度きとの多き世に
嬉しきとは、世にも無し
蟪蛄程の勇を鼓じ

城を攻め取り、地を掠め
國を疲らす、不仁の大將
比較を取れば、石と綿
譬を引くも、愚かなり
光り輝く、日の本と
光りを競ふ事ならん
凡太は却つて、大孝行
其の達徳に、孝を兼ぬ
其の智は及べど、愚は及ばず
別けて芽出度き、此の親子
一寸前きの見へぬ身が
龍車に勝さる、諸君等の

卓抜奇偉の御意見を
顔は洗へど、心の底
覺へず知らず、吐きにけり

一本頂戴したきまゝ、
洗はず寝惚けて、ぬ言をば
眞平御免下さいませ

明治廿三年五月五日印刷
同 年五月廿六日出版

版權登錄

神川縣平民
松本卯之助

本郷春木町三丁目四十九番地
出繩方寄留

瀨山 佐吉

淺草區黒船町十五番地

町田 宗七
日本橋區新右衛門町十番地

板 權 有 所

著述者

發行者

印刷者

上田屋書店

大川屋書店

辻文書店

内藤書店

山口屋書店

井上書店

明進堂書店

近江屋書店

松成書店

特別
販賣

3
2

會育教本日大

1	冊
57	函
6	架
291	號

編 譯 書

特19-695



1200500791290

19

95